

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2012

2

ISSN 1340-8917



特集 ■ 演劇による地域活性化

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



特集

演劇による地域活性化

4 演劇による地域活性化の今日的意味

後藤和子 (埼玉大学経済学部経済科学研究科 教授)

8 北海道富良野市 「富良野塾」後も演劇によるまちづくり

太田竜介

10 岩手県滝沢村 「生」の芸術作品を通じた地域づくり

菊田悌一

12 埼玉県富士見市 「南畑お月見一座」が地域に元氣と笑い

木村久志

14 東京都北区 演劇を通じて地域の「絆」強める

渡辺和徳

16 山梨県甲府市 復活「桜座」を地域文化の拠点に

龍野治徳

18 富山県南砺市 演劇が過疎の村に活力もたらす

野原順作

20 石川県七尾市 能登演劇堂から全国へ文化発信

山下澄子

22 愛知県知立市 わがまちへの「自負と愛着」を発露

芹澤由貴

24 京都府宇治市 山城「こくみん劇」がもたらした絆

大橋敏裕

26 広島県広島市 50年超える参加型の市民劇場

井上邦枝

28 徳島県那賀町 保健師が立ち上げた「もんでこい劇団」

藤岡美恵

30 熊本県大津町 生活劇で日常の矛盾をあぶり出す

吉良鶴雄

レギュラーレポート

32 地域トビックス 兵庫県姫路市 「B級ご当地グルメの祭典！」の効果絶大 大山嘉文

34 地域再生実践塾 平成二十三年度第五回 愛媛県松山市 まちにストーリーを！ 泉谷 昇 (いよコロザシ大学 学長)

36 合併市町村住民組織活性化支援事業 (千葉県香取市) 地域全体が来訪者を迎える農村ギャラリー 伊藤敏行

38 地域づくり団体探訪 琴引浜の鳴り砂を守る会 琴引浜の鳴き砂を次世代に守り伝える 京都府京丹後市

40 スポーツ拠点づくり推進事業 (佐賀県佐賀市) 「夢はウィンブルドンへ」を合言葉に 田中泰司

42 アンテナショップ 都内アンテナショップ53店舗に

43 ～北から南から～ 神奈川県綾瀬市 弥生後期の環濠集落に注目！ 井上洋一

44 東京都立川市 孤独死ゼロ、加入率100%の秘けつ 佐藤裕介

45 首長の思い 新しい百年に向けてのまちづくり 釘宮 馨 (大分市長)

48 センター通信

グラビア

2 演劇による地域活性化

46 都道府県漫遊 【福岡県】

47 手前みそですが… 【和歌山県橋本市】



清洲城での演舞の様子

愛知は、信長・秀吉・家康の三英傑をはじめとする数多くの戦国武将を輩出した地であり、城・史跡・博物館など、武将にゆかりのある観光資源が豊富にある。愛知県ではこれらの観光資源を活かした「武将観光」を推進するため、愛知ゆかりの戦国武将の妻・娘などで構成される「あいち戦国姫隊」を結成するとともに、武将観光施設を巡るスタンプラリーを実施中だ。

「あいち戦国姫隊」は、犬山城や岡崎城などの武将観光施設で定期的に演舞を行うほか、県内外で開催されるイベント等で「武将観光」をPRしている。愛知という地域が持つ、愛知ならではの魅力を活かした「武将観光」に、今後も注目していきたい。

「あいち戦国姫隊」の活動やスタンプラリーの詳細については「武将のふるさと愛知」のHPに掲載。(写真提供：愛知県)

○スタンプラリーの実施期間：平成23年8月1日～平成24年2月29日

問合せ：「武将のふるさと愛知」キャンペーン事務局 電話052-582-8660、HPは<http://www.busho-aichi.jp/japanese/home/>

「あいち戦国姫隊」

表紙

日本の元氣は東北の復興から

● 高向 巖
(財) 地域活性化センター会長
(札幌商工会議所会頭)



平成二十四年も早や一カ月、皆さまにおかれましてはどのような新年のスタートを切られましたでしょうか。

わが国経済は、長期デフレによる経済の停滞に加え、現在に至るも昨年三月に発生した東日本大震災により縮小した消費や生産は完全には回復せず、さらには、歴史的な円高による国内産業の空洞化が懸念されるなど、予断を許さない状況にあります。

私は札幌商工会議所会頭として、北海道経済にも目配りする立場ですが、北海道においても公共事業の大幅な削減やデフレ長期化等の影響から脱却できぬまま、震災の影響を被り、景気は依然として停滞しています。

札幌商工会議所では、地域経済の萎縮状態からの脱却を図るべく、地域を支える中小企業の経営安定化を最重要事項と捉え、激変する経済の動向に即した資金繰り対策や経営相談など、きめ細やかな経営支援強化に注力して参りました。引き続き、中小企業の活力維持と自立的発展を第一に、中小企業の振興を通じた地域社会の発展を目指し、積極的に事業を展開する所存です。

一方、今後の日本の成長においては、震災復興が進む東北が欠かせない存在となります。北海道と東北はひとつの経済圏でもあり、道内経済が浮揚するためには、道内企業と東北地方の企業が相互に結びつき、市場を一体化させることが重要と考えております。

加えて、北日本全体の経済が活性化されれば、被災地復興の後押しにも貢献できます。そのためには、道内の社会資本整備が急務であり、北海道新幹線の札幌延伸や高規格幹線道路の建設促進について、速やかに整備が図られるよう粘り強い活動を進めて参ります。

さらに本年は、北海道経済の成長力強化のため、特に「食」と「観光」分野でこれまでの取組みに加え、一層の機能強化を図っていきます。「食」の分野では、地域

資源活用と高付加価値化により需要を創出し、道外・国外における商談会等の機会を増やすなど、海外への販路拡大などの支援体制を強化して参ります。

また「観光」分野においても、新たな観光資源の発掘と関連ビジネスの育成を図り、観光客誘致に力を入れるとともに、語学研修の実施や接客サービスの講座等の開設など、海外来訪者の受け入れ態勢も整備していかねばなりません。

先行き不透明な厳しい経済環境ではありますが、こうした時だからこそ、「地域・企業の活力を生み出す商工会議所」として、地域総合経済団体としての責務と役割を果たし、地域産業の発展に向け、諸事業に鋭意取り組んで参る所存です。

地域経済の再生・発展は、北海道のみならず全国共通の課題です。地域の産業を再生し元気にするには、地域に根差した企業活動の活性化や観光、農林水産業の振興、将来を担う人材の育成など、課題は少なくありません。地方での雇用創出や、地域の特性や伝統を活かしたまちづくり等についても一層の創意工夫が求められます。

地域が元気にならなければ日本は元気になりませんが、震災後の日本においてはとりわけ、東北の元気回復が欠かせません。そのために、官民挙げた被災地支援や震災復興の進展が必要です。

世界的な激動は今年も続くと思われます。そうした中で、地域活性化センターとしては引き続き、各地域がそれぞれの「地域力」を高められるよう、諸施策を通じて支援して参ります。

最後になりましたが、全国の地方公共団体やまちづくり団体、企業の皆さまの益々のご繁栄をお祈り申し上げますとともに、当センターへの皆さまの特段のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

演劇による地域活性化



劇団ゆうによるミュージカル公演「美女と野獣」
● 岩手県滝沢村 (p10-11)



富良野市と NPO の協働で開催された「ふらの演劇祭」
● 北海道富良野市 (p8-9)



北区 AKT STAGE による演劇体験教室
● 東京都北区 (p14-15)



「南畑お月見一座」の出演者らが全員集合
● 埼玉県富士見市 (p12-13)



世界の優れた舞台作品を紹介してきた「利賀フェスティバル」の様相
● 富山県南砺市 (p18-19)



復活櫻座では音楽、演劇、映画など多彩な公演が…
● 山梨県甲府市 (p16-17)



第11回「しみん劇」、小学校6年生から67歳の大人まで、元気いっぱい

● 愛知県知立市 (p22-23)



能登演劇堂で行われた無名塾のロングラン公演「マクベス」

● 石川県七尾市 (p20-21)



52周年を迎えた演劇鑑賞団体の会員たち

● 広島県広島市 (p26-27)



山城こみねっとが開催した市民劇の出演者ら

● 京都府宇治市 (p24-25)



誕生して10年、「ほりだし劇団」の女性団員が熱演中

● 熊本県大津町 (p30-31)



保健師が立ち上げた「もんでこい劇団」による公演場面

● 徳島県那賀町 (p28-29)

演劇による地域活性化の今日的意味

—文化経済学の視点から考察する—



埼玉大学経済学部経済科学研究科 教授 ● 後藤和子

1、はじめに

歴史的に見れば、演劇は、日本の地域社会やコミュニティにとって根源的な存在であった。それは、四季折々の祭りや祭礼と結びつきながら、ハレの日の楽しみとして深く人々の生活に浸透した。日本研究で有名なドナルド・キーンは、日本ほど、演劇の種類が豊富な国はないと指摘する¹。その生活への浸透ぶりは、江戸中期以降に建てられた農村舞台が、調査されただけでも、千七百七十七カ所あったことから示唆される。農村舞台は集落ごとに建てられ、そこでは、農民自ら歌舞伎や文楽を上演した。

日本の演劇は、幕府の庇護の下にあった能や、都市の興業として演じられた歌舞伎や文楽を除けば、もともと地域やコミュニティと一体のものであった。そのため、演劇による地域活性化とは、

もともと日本にあった演劇のあり様を復元する動きにも見える。しかし、高齢化や過疎化、そしてグローバル化が急速に進む状況のなかで、「演劇による地域の活性化」を、演劇によってコミュニティの絆を回復するとか、観光客増加による経済効果といったステレオタイプで考えてよいものだろうか。

特に、近年は、地域活性化とは観光客の増加であるという視点が強調され、スポーツも文化も観光客の増加に貢献する政策ツールとして扱われることが多い。しかし、演劇と地域の関係はもっと多面的で、多くの可能性を孕んでいるのではないだろうか。そもそも、近年、演劇に限らず、地域を舞台としたアートフェスティバルが増加しているのは、何故だろうか。本稿では、演劇による地域の活性化について、フェスティバルを一つの切り口として、国際的な視野から、その可能性を探ってみたい。

2、何故、アートフェスティバルが増えているのか—文化経済学の視点から

近年、日本だけでなく世界中で、アートフェスティバルが増加しているのは何故だろうか。フェスティバルは、その質が卓越したものであれば、地域や都市のイメージや文化的アイデンティティを高めることによって、観光客を増加させるだけでなく、文化以外のビジネスや創造的な人々を惹きつける。今日、各地域や都市は、グローバル化の中で、いかに創造的な人々やビジネスを惹きつけられるかが、問われている。そのため、地域や都市の魅力を高めるフェスティバルが、地域活性化の政策ツールとして注目されるようになった。これが、アートフェスティバルが増えている第一の理由である。

第二の理由としては、地域や都市へのインパクトという外部効果を除いても、演劇や音楽をフェ

ステイバルという形態で行う合理的な理由があることが挙げられる。Fes Freix は、需要と供給の観点から、劇場等の文化施設で行われる公演とフェスティバルを比較し、フェスティバルが増加する理由を次のように分析する²⁾。

まず、需要の観点からは、

①第二次世界大戦後の所得の増加が、休暇や文化への消費を増加させている。

②ヨーロッパの多くの国では、フェスティバルが休暇中に行われるため、機会費用がなく（仕事があれば、仕事を断念し、従って収入を断念するという機会費用が発生する）、旅行費用も安い（ヨーロッパでは、交通もホテルも、休暇中は価格が安い）。

③劇場公演では公演日が限定されているため、観客は、公演を見るために日程を合わせなければならない、チケットを入手するにも苦労する。しかし、フェスティバルでは、旅行会社を通じて容易にチケットを手に入れることができる。つまり、取引費用がかからない。

④フェスティバルは観客の数が多いため、企業スポンサーにとっては、通常の劇場公演より、スポンサーになって自社製品を宣伝するメリットが大きい。

⑤政治家も、芸術への支援者として、フェスティバルのオープニング等でメディアの注目を集めやすい。

供給の観点からは、

①アーティストやスタッフの大部分は、通常、劇場等で雇用され、その仕事の合間にフェスティバルで短期間雇用される。そのため、彼らを雇

用するコストは、常設の劇場等に比べて安い。

②フェスティバルの公演に使われる場所は、野外や教会などである。そのため、通常の劇場より会場費がかからない。

③フェスティバルは、行政ではなく私的セクターが担うことが多いため、劇場に比べて、行政的制約が少なく、芸術的アイデアを自由に実験でき、企業やスポンサーとの協同も容易である。また、劇場の労働組合による労働時間の制限等からも自由である。

④通常の劇場でシーズンチケットを買う観客は、保守的な嗜好を持つ傾向がある。フェスティバルでは、そうした縛りから解放されて、新しい試みができる。

フレイの分析は、ヨーロッパのフェスティバルを念頭においているため、日本の実情にはそぐわない点もある。しかし、地域で開催されるフェスティバルには、どのような強みがあるのかを考える際には、大きな示唆を与えてくれる。需要の観点からは、通常の劇場公演に比べて、観客にとつての様々なコストを削減する効果があることが示唆される。観客にとつてのコストは、チケット価格のみでなく、機会費用や情報を得るための取引費用も含まれる。休暇と一体となったフェスティバルでは、これらのコストが小さくなるため、消費者にとつては、劇場より敷居が低いと感じられ、参加しやすい。需要の観点から、地域のフェスティバルは、観客の数が劇場公演より多いため、企業やスポンサー、政治家の協力を得やすいという指摘も興味深い。

供給の観点から述べられている労働組合の制約

等は、日本には当てはまらないだろう。しかし、劇場や文化施設が規則等で制約され、シーズン券を購入する観客の保守的な嗜好に縛られやすいのに対して、フェスティバルは、私的なイニシアティブで行われることが多いため、行政的制約が少なく、芸術の実験もでき、企業やスポンサーとの協同もしやすいという点は、重要である。また、野外を含む様々な既存施設を使うため、施設費がかからない、アーティストやスタッフの雇用が短期間であるためコストが少ない等も、地域でフェスティバルを行う際の強みとなるだろう。

本特集で取り上げられる事例は、演劇フェスティバルだけではない。むしろ、フェスティバルの形態をとらない演劇の事例が多い。例えば、文化施設で行われる演劇もあれば、NPOが文化施設を管理運営し、地域の劇団と連携している事例もある。あるいは、地域の住民が劇団を作って演劇公演を行っている事例もある。

しかし、近年、特に若い観客にとつて劇場や美術館等の文化施設の魅力が低下し、アートフェスティバルをはじめとしたオルタナティブなスペースが若い観客を惹きつけていることを考えると、演劇も例外ではないように思われる。文化施設を拠点とした演劇による地域活性化を否定するつもりは毛頭ないが、財政難から文化施設への補助金が削減される現状では、演劇においても、フェスティバルという形態が持つ強みを生かすことを考えてもよいのではないだろうか。

もともと、日本の地域における演劇の上演は、祭り結びついていた。祭りの要素を取り込むことによって、演劇空間が都市や地域全体に広がり、

新たな演劇需要が喚起され、企業やスポンサーとの協同が進展するのは、文化施設にとっても望ましいことではないだろうか。

3、アートフェスティバルの機能と経済効果をめぐって

次に、前述の議論を踏まえて、アートフェスティバルの機能と、フェスティバルの経済効果について、問題提起をしてみたい。フェスティバルという一過性のものだと思われるかもしれないが、エディンバラフェスティバル等の著名なフェスティバルは、第二次世界大戦後六十年以上も継続して行われている。そのため、世界における認知度も極めて高い。ヨーロッパのアートフェスティバルは、第二次世界大戦後の文化復興という目的で開始されたものが多い。

フェスティバルの機能としては、第一に、芸術監督やディレクターを置き、芸術の質を重視するとともに、実験的な上演を行うことによって研究開発の機能を果たしている。第二には、新しい観客を開拓する機能がある。第三には、文化施設以外に、教会や広場等、都市や地域のいたるところで公演や展示が行われるため、場の魅力の発見という機能を持つ。また、実験的な公演を行うことで、その後のアートの流通に何らかの変化をもたらすことが期待される。これらの機能は、前述のフェスティバルの需要と供給の観点からの分析とも合致する。

世界的に見て、過去十五年間にフェスティバルの数は顕著に増加し、これらの機能の他に、地域活性化、特に、観光（フェスティバル・ツーリズム）や都市マーケティングのツールとして活用されるようになった。しかし、文化経済学が注目するのは、フェスティバルの短期的な経済効果、つまり、フェスティバルが生み出す雇用と所得、消費による経済波及効果ではない。

何故なら、この短期的経済効果には、ボランティア労働や非市場の価値が考慮されていない。アートフェスティバルが地域を活性化するプロセスには、ボランティア労働や非市場の価値が大きな役割を果たすが、その効果は長い時間をかけて現れるもので、短期間の所得や消費の増加による波及効果だけで計れるものではない。

文化経済学が注目するのは、フェスティバルによる長期のロケーション効果、つまり、都市や地域を魅力的にすることによって、クリエイティブな人々を惹きつけ、新しい産業を創出するとともに、社会的包摂につながる効果である。演劇による地域活性化を考える際にも、このロケーション効果は重要な視点である。

4、国際フェスティバルとしての演劇祭——文化外交の視点から

演劇フェスティバルが国際的なものであれば、文化外交の視点からその今日的意味を問うこともできる。日本における国際演劇祭の事例としては、富山県南砺市の利賀フェスティバルと沖縄市のキジムナーフェスタ等がある。前者が主として大人を対象とした演劇祭であるのに対して、後者は子どもを対象とした演劇祭である。利賀フェスティバルは一九八二年に開始され、キジムナーフェスタは一九九四年の開始である。

筆者は、キジムナーフェスタの外部評価を依頼され、大学院生とともに二〇〇七年から二〇〇九年まで、評価を行ったことがある。子どもを含めて七千人を超える観客調査を三年間継続的に行ったのは、日本では初めてのケースである。二〇一一年には、十四カ国、四十八団体、五十一作品が上演され三万五千三百三十二人の参加があった。海外からは十二カ国、二十二団体が招待され二十六作品が上演された。他に国際シンポジウムやワークショップも行われた。

キジムナーフェスタは、作品の質や文化的価値が高く評価されるだけでなく、日本の演劇祭の中で、最も国際フェスティバルの特性を備えている



2007年キジムナーフェスタの閉会式



キジムナーフェスタの主役は子ども

と、海外からも高く評価されている。それは、世界中から子どものための演劇関係者が集まり、出会い、作品に関する交渉やネットワークを作る場となっているからである。国際共同制作も行われ、二〇一一年には七カ国、十団体による共同制作五作品が上演されている。

近年、ソフトパワーやパブリック・ディプロマシーが重視されるようになり、その文脈で文化による外交も注目を集めている。ソフトパワーとは、強制や報酬ではなく、国の魅力によって望む結果を生む能力のことであり、パブリック・ディプロマシーとは、相手国の人々の心と精神を勝ち取ることによって、国際舞台での交渉を有利に進めることである。

例えば、韓国は、文化国家のイメージ向上は、

文化や産業の国際競争力の底上げにもなるとして、積極的な国家ブランディング戦略を行ってきた。韓国は、文化産業を次世代の経済成長の原動力にしたいと考えているという⁴。

文化外交は、重要な局面で大きな成功を収めることもあるが、政府が前面に出すぎると失敗するし、そもそもイメージを国家が操作することが可能なのか等多くの疑問もある。今日では、政府は、多様なアクターによる多層的な国際ネットワークを支援するのが望ましいという見方もある。いずれにしても、文化による相互理解やイメージ構築が、相手の心と精神を勝ち取る上で重要だとみなされていることには、変わりはない。また、文化産業やクリエイティブ産業が、次世代の経済成長の原動力であるという見方も、世界的な支持を得ている。

国際フェスティバルは、国際交流を超えて、民間のイニシアティブによるソフトパワーや文化外交という視点からも、積極的に評価されるべきではないだろうか。キジムナーフェスタの観客は子どもである。子どもの時から、演劇を通して様々な文化に触れることは、国際的なセンスを養う意味でも意義が大きい。また、キジムナーフェスタが、観光と結びついて、アジアから多くの観客を集めることができるようになれば、アジアの人々の心と精神を捉えることもできるだろう。そうなれば、文化産業としての成長も期待できる。

5、おわりに

以上、フェスティバルを一つの切り口として、

演劇による地域活性化について、様々な考察を試みた。地域で演劇を上演すれば地域が活性化するわけではなく、そこには、政策や戦略が必要である。それを考えるために、何故、フェスティバルという形が増えているのか、その強みを考えてみた。強みは、需要と供給の側面から、あるいはフェスティバルの機能や長期の経済効果の側面から捉えることができる。

最後に、今日注目を集めているソフトパワーや文化産業の側面から、国際フェスティバルの可能性を考えてみた。従来、演劇による地域活性化は、地域コミュニティの回復とか、教育との連携、あるいは短期的な経済効果の観点から、捉えられることが多かったと思う。本稿では、それらとは異なる見方を提示したつもりである。演劇による地域活性化の政策や戦略を考える一助になれば幸いである。

〔注〕

1 ドナルド・キーン著・吉田健一／松宮史朗訳『能・文楽・歌舞伎』講談社学術文庫、2001年。

2 Frey, B.S., "Festivals" Towse, R. ed., *A handbook of cultural economics*, Edward Elgar, 2003。

3 この評価は、「国際児童・青少年演劇フェスティバル沖縄・調査報告書」（2010年3月）にまとめられている。

4 文化と外交に関する歴史や批判的な視点については、渡辺靖『文化と外交』中公新書、2011年、に詳しい。

「富良野塾」後も演劇によるまちづくり —多くの市民が芸術創作活動に参加—



富良野演劇工場 工場長

● 太田竜介

一九八四年に脚本家の倉本聰氏が開設した俳優と脚本家の養成機関「富良野塾」は、毎年全国各地から約二十人の若者が集まり、二年間の共同生活を送りながら倉本氏の講義を受けてきた。

卒業生三百七十五人を輩出し、二〇一〇年四月の閉塾後は「富良野GRUP」として引き続き演劇活動を行い、二〇〇六年からは夏冬二回のロングラン公演と全国公演を行っている。

富良野塾を支援してきた市民から、劇場建設計画の声が上がったのが今から十八年前、一九九四年のことだ。そして二〇〇〇年十月、富良野の森の中にオープンした「富良野演劇工場」は、設計の段階から、倉本氏やプロの照明家・音響家・俳優などが参加し、創り手から見た理想を具現化した劇場となった。

倉本聰氏の助言を活かす

『「多目的」は限りなく『無目的』に近づく』という倉本氏のアドバイスを受け、市民文化活性化

のために何が一番必要かを設計段階から十分に考え、客席（三百二席）より舞台スペースを広く取り、大道具製作室（ワークショップ）・衣装室・リハーサル室・グリーンルーム（出演者・スタッフのサロン）など、創り手にとって必要な設備を備え、アーティストの想像力をフルに発揮できる環境を整えた。

さらに、倉本氏は「大切なのは劇場そのものではなく、完成後に舞台でどのような公演が行われ、市民が喜んでいるか。すなわち『ハード』ではなく『ソフト』が一番重要だ」と述べられている。

この劇場ではプロのアーティストによる多くの公演が行われてきた。どのアーティストにも設備の素晴らしさを評価していただき、そのことが、あらゆる演出を表現できる素晴らしい公演に結びつき、結果的にお客様にも感動を与えることができたと考えている。

そして、「良いソフト」を生み出すには運営するスタッフたちがどれだけの熱意を持てるかということが重要である。



「富良野演劇工場」の外観（夏）

私たちのNPOは約百三十人のボランティアで組織されており、公演時の駐車場整理から受付・喫茶・売店・場内整理など全てボランティアスタッフが行っている。さらには、チラシ・ポスター製作やチケット販売、出演者・スタッフの食事作りなど、主催事業・貸し館事業に関わらず、公演制作業務を可能な限りサポートすることにより、主催者や出演者との関係が密になり、一体感のある事業が行われる。

秋の「ふらの演劇祭」は 市民劇を含め五公演

単なる観客としてではなく、少しでも公演に関わり、アーティストと触れ合い、それぞれが「文化創造の担い手のひとり」としての意識を感じ始めたとき、劇場ははじめて「市民による」「市民のための劇場」になる。



富良野塾公演「谷は眠っていた」

二〇〇二年の富良野市開庁百年を記念して、富良野市とNPOの協働で開催された「ふらの演劇祭」は、二〇一二年十月で十回目を迎える。

富良野市内・近郊の小中学校四校に富良野塾OBの俳優が各十回の演劇指導を行い、富良野演劇工場で本番を迎える。開催三日間で市民劇を含めた五公演を行い、九年間で延べ千五百人を超える市民が舞台に立った。

誰もが表現者として舞台に立つことができる。そしてスポットライトを浴び、観客からの拍手を浴びる。この喜び。勉強などの評価とは違う、点数では表せない評価、そして達成感。そして何よりも、協働による他者とのコミュニケーション！演劇祭が終わっても、講師、教師、生徒、観客が、街で会えば気軽に声をかけ合える環境が豊かな心を育むと実感している。

何といっても、この劇場の強みは倉本氏のお膝元であること。七十七歳になつてなお現役の脚本家として活躍し、二〇〇八年に、放送された連続ドラマ「風のガーデン」のロケ地は公開され、多数の観光客が訪れている。

年二回の公演に 全国から一万人超を動員

また、年二回行われる富良野GROUPによるロングラン公演は毎年、全国から一万人以上を動員し、宿泊施設・飲食店などと連携することによって、経済効果を生み出している。これは市民の理解や協力関係を深めることにつながり、より「演劇によるまちづくり」が推進されている。

都会に目を向けるのではなく、都会がこちらに目を向けて、観劇のために足を運ぶ仕掛けが、少しずつ実を結んでいる。

NPO認証第一号として、失敗は許されないと の思いで走り続けてきた十三年間。何とか赤字を出さずにやってきたが、課題は少なくない。

先ずは、運営資金。NPOの事務局長を兼任している私は、年間何本もの補助金申請を行い、報告書も含めた事務作業は膨大である。しかも、富良野市からの管理委託費の中に事業費はほとんど含まれておらず、補助金なしでは三百席の小劇場では赤字になり、営利目的ではないNPOといえども、経営は成り立たない。

NPO運営に必要なのは「熱」

補助金の額も年々削減される中、今後は補助金に頼らない独自の運営が求められている。劇場運営を健全にし、役者やスタッフが演劇を生業として生活できる環境を作っていくために、富良野GROUPの公演期間を今後さらに延長し、年間観客動員が二万人を超えることが、これからの大きな目標である。

また、NPO運営に必要なのは「熱」だと考えている。一九九九年のNPO設立当初から二〇〇〇年の劇場のこけら落としの間、NPO理事・ボランティアスタッフには「熱」があった。その大きな「熱」が、様々な企画を生み出し、観客動員へとつなげてきた。

しかし、運営が軌道に乗るにつれ、「熱」は少しずつ冷めていく。あの時の「熱」をこれからの世代に受け継ぐことが、我々の大きな使命であり、そのために、「演劇祭」など子どもたちが参加できる事業や、市民による企画事業など、多くの市民が芸術創作活動に参加できる企画が求められている。

そして五十年先、百年先の「未来の子どもたち」が、劇場を拠点とした心豊かな芸術活動に取り組んでいる姿を想像し、その『想像力』が『熱』と なって受け継がれていくものと信じている。



ボランティアスタッフによる食事作り

「生」の芸術作品を通じた地域づくり —出会い・体験・選択の多い社会を目指し20年—

NPO法人劇団ゆう理事長 ● 菊田悌一

創作活動の理念

現代社会は、テレビやパソコン等の情報媒体を通じて世界中の優れた芸術作品や舞台鑑賞が可能であるが、それらの臨場感を「生」で体感する機会は、東京（中央）から離れるにつれて極端に少なくなる。

しかし、優れた感性豊かな子ども時代に多様な芸術文化に出会う機会、実際に体感させる機会を多く与え、その中から個々の感性や適性に合った専門的な道の選択をさせることができる地域社会の構築は、青少年の心豊かな人間形成や将来の地域社会における多様で柔軟性に富んだ人材の育成にとって必要である。

こうした理念から、劇団ゆうは世代を越えた創作活動を通じて、子どもたちの夢を形に、感動を成長につなげていく活動を行っている。

以下に主な活動をご紹介します。

取り組みの内容

○劇団ゆうの公演

劇団ゆうは、団員八十名、準団員三百五十名（岩手県内六拠点）で構成されている。

年齢層は、幼稚園児から高齢者までと幅広く、年齢によって、ひよこ組・子ども組・青年隊・大人組・制作スタッフに分かれており、子どもたちに本物の芸術文化を惜しみなく提供するため、プロや専門家の指導の下、年間三百日の練習と岩手県内外で二十公演程を実施している。

移動公演を行う場合はどんなに遠い都道府県でも必ず公演先で出演希望者を募り、事前に一定回数を訪れて歌やダンス、演技を指導して、本番の舞台の一部分に出演してもらっている。

また、多くの子どもたちに参加や鑑賞の機会を提供したいとの趣旨で、無料公演を原則としているが、唯一有料となっている「チャリティミュージカル公演」では、貧困や自然災害、政情不安の

ため生活が困窮している子どもたちの存在を知るために、収益金全額を世界の恵まれない子どもたちに寄付している。

○ミュージカルスクール事業

これは岩手県公立文化会館を活動の拠点に、劇団員が歌やダンスの出張指導を一定期間行い、最後に劇団ゆうとの合同公演を行う事業である。最終的にはミュージカルスクールごとの単独公演を目指しており、一番歴史がある奥州市胆沢文化創造センターでは、低学年と高学年に分かれて公演したり、独自で県外公演や国民文化祭に招聘されるまでに至っている。

ミュージカルスクールは、文化庁、岩手県、市町村等の助成事業として、県内六文化会館で実施しており、相互交流公演や劇団ゆう公演では一堂に会して共演している。

○夢いっぱいコンサート事業

岩手県内には、児童数が十〜二十名ほどの小規模学校が多くあり、単独では芸術鑑賞事業を行えないでいる。そこで俳優の常田富士男さんたちの協力を得てミュージカル公演や本格的な演劇、本の朗読の公演事業を実施している。

訪問先の児童・生徒数に関わらずフルスペックの人材・機材で取り組んでいる。実績には児童数四名の小学校に大型バス二台ということもあった。劇団ゆうがボランティアで実施しているものと岩手県教育委員会「新進・若手芸術家派遣事業」の派遣で実施しているものがある。

○「滝沢ふるさと交流館」の指定管理業務

「アート・スクランブル・コミュニティ（造語）」を掲げ、芸術文化を発信するだけではなく村民が



旗揚げ公演作品「ボク、天使をみたよ…」の一場面



「ピーター・パン」の一場面



「美女と野獣」より 野獣とベルの晩さん会

集うコミュニティを目指している。手を伸ばせば本に届く施設として村民からの献本で館内に本棚を設置。廊下には村民のアート作品を展示する「アート・365」等々を実施、村民を巻き込んだ活動で施設の利用度も年々増加している。

指定管理業務は、貸館業務と自主事業で構成されている。自主事業では小学生が放課後に地域の大人達から十六コース（料理や手芸、英会話等）を学ぶ「チャグホ塾」、プロの声優や俳優が本を朗読する「読み聞かせコンサート」、全国から千三百通以上の応募がある「ありがたうの手紙」、子ども達に舞台芸術を体験させる「アーティスト育成事業」、利用者一名につき一ポイントを一元に換算し、世界の恵まれない子ども達を支援する「チャリティポイント制」を実施している。

利用者は、施設を利用するだけで社会貢献につ

なっており、現在、タイとアフリカの児童三名を支援しており、館内では支援している児童の成長の様子を掲示している。

○県内自治体・文化会館等の形成

県内の文化会館は、資金、人材、職員数等の課題を抱える所が少なくない。そこで岩手県内公立文化会館複数館連携事業実行委員会を組織、その代表館として協働事業や人的相互支援等を実施して、経費の削減や効率化を図ると共にネットワーク化による強みを生かし将来展望が開ける文化事業に取り組んでいる。

岩手から全国へ、そして世界へ

劇団の活動がどれほど拡大しても、変わらない二つの柱がある。一つは、住む地域に関係なく、

全ての子どもに多様な芸術文化の体験機会を提供する理念。もう一つはお金だけに頼らずに強いネットワークでその実現を目指すこと。「どこで生まれても、努力すれば、誰でも成し遂げられる事」が世の中には沢山あること」を実証していきたい。

また、東日本大震災の芸術文化の復興支援活動も長期にわたって実施していく。

われわれの活動については、劇団ゆう支援ネットワーク、劇団ゆう賛助会など総勢千六百名の様々な個人、団体、組織が資金面、人材面などで支えて下さっているが、さらなる安定した活動を進めるため「認定NPO法人」の認定を得て、全国規模の財源ネットワークの強化と組織としての継続性を確保する取り組みを進めていく考えである。

「結成十年後には県内、二十年後には全国へ」と、目標を掲げてきた劇団ゆうは、今年度で二十周年を迎えた。今後は活動の全国的な展開を目指す。

その次は、当然「世界へ」である。劇団ゆうが世界に向けて発信したいのは、「美しい国日本」と「日本人の美しい心」である。それを子どもたちが民話ミュージカルを通じて、世界に伝えていくのである。

「南畑お月見一座」が地域に元気と笑い —住民が演劇を通じて地元の課題を考える—



富士見市立南畑公民館館長

● 木村久志

毎年2月に公民館で新作発表

富士見市立南畑公民館は、毎年二月の第二土曜日に「南畑ふれあい劇場」を開催している。この南畑ふれあい劇場は、公民館で演劇を見る楽しさを味わい、併せて、劇を通して南畑地域の課題や現状などを皆で考えようという趣旨で始めた創作劇の公演である。

平成十年の第一回公演では、関係者の不安をよそに、ホールに用意した約百二十席の椅子が足りなくなり、立ち見まで出て大盛況だった。

南畑ふれあい劇場は、「南畑お月見一座」という地域の人達で構成する劇団の公演として、今年で十五作目の発表を迎える。

一座の演劇は、毎年公民館のホールを一杯にし、近年では、市外から訪れる来場者もいて、他の場所での出演依頼も多く寄せられている。

素人による手作りの演劇が魅力

「南畑お月見一座」の魅力は、何と言っても素人による手作りの演劇の一言に尽きる。

上演時間四十分程度の劇は、ドタバタ劇という表現が当たっているかも知れないが、当の本人たちは真剣そのもの。当日の舞台照明や大道具、小道具の入れ出しも出番のない座員がすべて交代でまかなう。

そんな劇だからこそ、失敗もよくある。緊張のあまりセリフを忘れたり、間違えたりすることもしばしばである。必要な小道具が舞台に用意されていないと、お互い顔を見合わせたまま沈黙だけが流れる場面。違う幕のセリフを言ってしまう、ちぐはぐな会話にお互い笑い出してしまいう場面もある。

また、調子に乗って思わず相手のセリフを言ってしまう、「俺のセリフ言うなよ！」と半分怒り気味のアドリブが飛び出ること。身近な題材を

取り上げた劇は、失敗もあるが真面目さと滑稽さが会場に伝わって、緊張感と笑いが絶えない劇となっている。

ちなみに、一座が演じた第一作は「農家に嫁いで」という、田園風景が多く残る南畑地域の農家が直面する嫁問題だった。東京都内から農家の嫁にきた「聖子ちゃん」の頭は金髪。作る料理も日本食以外の箸を使わないものばかりで、家族を悩ませる。三世代家族が当たり前の農家を背景に、嫁と姑問題をコミカルに描き、農業を存続していく苦悩を笑いとともに演じた。

その時の聖子ちゃん役は、現在六十四歳の男性座員。十五年前とは言え、自らの頭も寂しくなる中、女装に真っ赤な口紅、金髪のカツラでの登場は、出ると同時に会場を笑いの渦に巻き込んだ。



「農家に嫁いで」最後は水戸黄門登場！



第10作「夢ふるさとポンポコリン」地域に夢を…

来場者にとっては、顔見知りの出演者が意外な配役として登場するので、そこがまた面白さの一つでもある。

仕事のかたわら台本づくり

「南畑お月見一座」の演劇活動は、二月の新作発表を中心に展開される。毎年二月に新作を発表することをノルマとしてしまった？一座は、例年のように、秋の声を聞くと座長をはじめ一座の中座座員がそわそわし始める。

そうは言っても、仕事のかたわら地域の課題や現状などを織り交ぜた台本づくりは容易ではない。生みの苦しみを味わいながらその姿を見せ始



第6作「もひとつおまけにコンチキリン」伝統文化の再現

めるのは早くて十一月だ。

そこから週一回の練習が始まるが、台本を全員で読みながら、「この幕はこんな感じ」「ここではこんな音」と、皆で話し合いながら全体構成を作り上げていく。状況によっては、立ち稽古が始まってから台本が変更されることもある。

プロの手が一切入らない一座の演劇は、毎年、こんな風に本番を迎え、最後は時間との戦いとなる。それでも、本番をまとめ上げてしまうチームワークの良さと、自己責任の強さが一座の魅力でもある。

最高齢77歳の座員も

現在の座員は、女性四名、男性十六名の計二十名。岸信次三代目座長のもと、座員の年齢は三十歳代から最高齢七十七歳まで幅広い。職業も、専業農家や主婦、建具職、地方公務員、そして、駐在所の警察官や元都電の運転手などバラエティーに飛んだ劇団である。平均年齢はというと、多分六十歳を超えているだろうか。

演劇を見て、一座に入会したいという他地域の方は結構いるが、会則で「南畑地域に在住・通勤の人をもって組織する」としているのが玉に瑕（きず）。一座のある富士見市は、首都圏三十キロ圏内という立地条件ながら、南畑地域は市街化調整区域のため人口も少なく、勤め先もほとんどないという状況である。

人口十万人を超える富士見市ではあるが、市自体の面積は小さく、その約四割を南畑地域が占めて、今でも自然が多く残る地域となっている。

詐欺被害の寸劇には大きな反響

一座の公演以来や、二月の公演を楽しみにしてくれている方が多くなっている。

ここ数年の劇では、詐欺の被害を取り入れた演劇が反響を呼び、平成二十三年度は市からの依頼もあって、福祉施設等で座員少人数による詐欺被害の寸劇を十回程度演じた。

過去においては、NHKや新聞で活動を紹介していただき座員の励みとなっているが、南畑お月見一座も高齢化が進み、地域の若い世代の入会を心待ちにしている昨今となっている。

演劇を通じて地域の「絆」強める —つかこうへいの遺志を継ぎ地域密着の活動—



北区AKT STAGE ● 渡辺和徳

北区AKT STAGEは、二〇一一年八月に活動を開始したばかりの新しい団体（現在、NPO申請中）である。前身は北区つかこうへい劇団。劇作家の故・つかこうへいが東京都北区と手を組んで開設した劇団で、北区を拠点に十八年にわたって活動を続けてきたが、代表のつかこうへいの死去に伴い解散した。

つかこうへいの遺志を継ぎ、同じ東京都北区を拠点に、より地域に密着した形で活動ができないかと、劇団の有志が集り結成されたのが、北区AKT STAGEである。

その思いは名称にも表れている。AKTとはスベル違いのAKT。これにはさまざまな意味があるが、At KiTa-ku（北区を拠点に）という思いも込められているのである。

「北区に來れば、演劇ができる！」

我々が結成後、真っ先に取り組んだのは、演劇を体験してみたいと思っている人々のための演劇

体験教室「演劇教室」と「北区演技塾」である。

「北区・演技塾」は団体結成記念として行われた二カ月限定の無料ワークショップで、週一回、計十回の練習を行い、毎年北とびあ（*東京都北区にある複合施設）で開催されている演劇祭にて発表会を行った。

五十名ほどの方が参加してのワークショップは毎回笑いの絶えないぎやかなもので、そのうち約三十名が発表会にも出演して一時間ほどの舞台上演したのであるが、わずかな練習回数にもかかわらず見事な舞台であったことに我々自身、驚きを禁じえない。そして何より「楽しかった」という充実した笑顔が見られたことをうれしく思っている。

一方で「演劇教室」のほうは、「毎週木曜日に北区に來れば、演劇ができる！」をスローガンに、通年で行っている教室である。週変わり演技・ダンス・アクションの教室があり、予約制ではないので、参加者はスポーツクラブ感覚で好き勝手に教室に参加できる。

ダンスやアクションだけを目的にやって来る人
もいれば、身体を動かすのは苦手だからと演技
だけに通ってくる人もいる。参加者それぞれが自
分のペースで、好きなように演劇を楽しんでいる。
こちら昨年十二月に第一回発表会を行った
が、我々の恩師であるつかこうへいの作品と、拙
筆によるオリジナル作品とを上演し、計十八名が
出演した。

毎回笑顔の絶えない稽古と、数人だけでも集
まって練習しようとする熱意、そして終演後に感
極まって涙する参加者の皆さんの姿が記憶に新し
い。本年も秋ごろに発表会を考えているが、毎週
の教室ともども、より一層多くの人に楽しん
でいただける環境づくりを心がけていきたいと、意欲
を燃やしている。



演劇教室／レッスン風景（アクション）



演劇教室／レッスン風景（演技）



第15回演劇教室発表会「緋色の町」

豊かなコミュニケーション能力を育む

では、演劇を通じての地域活性とは何か。もちろん、前述のような教室を開催することで、関心を持つ人たちが集まれる場を提供することも一つではあろう。しかし我々は、演劇によってより豊かなコミュニケーション能力を育むことができないか、と考えている。

演劇とは、自己表現の場であり、自身の解放の場である。よく思われがちなことだが、演ずるということは「自分を偽ること」ではない。演技というものはすべて自分の内面に起因するもので、自分を解放し、自分の内面に生じた感情をありの

ままに表現して豊かなコミュニケーションを行う。それが演技というものである。なればこそ、ここに演劇というものの果たすべき役割があるように思う。

交通網と情報機器の発達した現代、地域というものの持つ役割は小さくなってきていることは疑いようもない。かつては地域の中で助け合っていることが、生きていく上で重要な役割を占めていたはずだが、いつでもどこにでも行けて、どこでも通信しあうことができる現代社会では、近くにいる人と関わらなければならない理由はどこにもない。

むしろ他人とは「自分の関わりたいときだけ関わりたい」という感覚が主流である今、いつ接しなくなるかわからない近所の人間とはなるべく関わらない方が楽だ、と思っている人が、特に首都圏において多いであろう。

しかしそれと同時に、昨年三月の震災以後、人との「絆」を求める風潮が高まっているこ

とも事実である。演劇を通じ、豊かなコミュニケーション能力を育むことで生み出されるであろう「絆」。そしてその「絆」によって、地域が果たすべき役割を再定義できないか。それが地域づくりの基盤になりうるのではないか。そう考えてやまない。

ここでもう一つ、前身の北区つかこうへい劇団時代から、十数年にわたって続けている取り組みを紹介したい。それは五十二歳の児童を対象に行っている「児童教室」である。

「児童教室」で内気な子が快活に

近年はやりの子役育成ではなく、ダンスや芝居を通じて身体を動かす楽しさ、大きな声を出す気持ちよさを知ってもらい、内気な子に元気になってもらおうと行っている教室である。

いろんな学校のいろんな学年の子供たちがいっしょになって学び、遊んでいく中で、初めはおとなしかった子供たちがやがて教室中を駆けずり回り、言葉は悪いが「悪ガキ」になっていく様子を見ていると、毎年胸が熱くなる。

初期の教室にいた子供たちの中には、すでに二十歳を越えた者たちもあり、中には今も親しくさせてもらっている子も少なくないのであるが、彼らがここで得た元気を胸に豊かな人間関係を築いている姿は勇気づけられるものがある。

なぜならばそれが、我々の団体の求めるところの体現にほかならないからだ。まだ新団体として再出発したばかりだが、これからも試行錯誤しながらの挑戦を続けていきたいと思っている。

復活「櫻座」が地域文化の拠点に —時代の変遷とともに演目も変化—



復活櫻座プロジェクト委員会事務局

● 龍野治徳

甲斐の国、山梨県の真ん中にある甲府盆地。そこに位置する甲府市は、江戸の頃から活気のあるまちだった。甲州街道がその頃の文明・文化を繋ぐ運んでいたのである。

後に（昭和十四年）、甲府に住んだ太宰治は、『新樹の言葉』の中で、「きれいに文化のしみとおっている街である」と甲府に思いを寄せている。

古い「櫻座」については、劇作家で演出家でもあった小柳津浩が「山梨の演劇」の中で、次のように書いている――。

時代が変遷して「文明開化」の明治期に入ると、武士階級が失業したため「芝居小屋」は一時、衰えを見せていた。この原因の一つに、時の県令藤村紫朗が明治六年十二月に納税の布告を発してから、興行成績が悪くなったことも挙げられる。

しかし、明治も八、九年になって、世間も穏やかになると、再び甲府の「芝居熱」は高まる。明治九年（一八七六）八月、魚町の魚商人三井与平によって桜町二丁目（今の甲府市中央一丁目）に三井座（後の櫻座）が建てられる。大商人・亀屋

与兵衛が顔役として、全甲州の興行権に対抗した開座であった。

明治以降の「櫻座」の変遷

三井座はその後、明治十七年（一八八四）に櫻座と改称され、この年の三月九日に披露興行をしている。そこで中村時蔵と坂東秀佳の一座が演じている。

さらに明治二十三年（一八九〇）八月には、桜町四丁目（今の中央一丁目）に劇場が移され、規模を大きくした。

その後、明治三十五年（一九〇三）には、三日町新道（今の中央四丁目）寄席「巴亭」が劇場となり、佐渡町通りの相生町（今の相生三丁目）に舞鶴館（後に「甲府座」と改称）が設立されるなど、甲府の街では歌舞伎芝居がもてはやされた。

しかし、時の流れとともに、新しい芝居（新派）が大衆の関心を集め始めていた。甲府へは、日清戦争前後に壮士芝居の創始者・角藤定憲が来演し

て話題となり、新時代に即応する演劇の到来に人々は新たな期待を持つようになった。
この頃、一方では、日本に移入された活動写真が大衆の心をとらえ始めていた。

時代が大正期に入ると、芝居に対する興味も歌舞伎から新時代の演劇に移っていった。

櫻座で上映された「トスカ」「鶴亀」「玉手箱」などの近代劇も好評を博した。明治・大正・昭和初期と時代と共に流れて、浮き沈みしていた芝居場も、活動写真に始まった映画の時代には勝てず、次々と映画館となっていった。

ついに昭和五年（一九三〇）十一月、櫻座は百貨市場となり姿を消した。一流の歌舞伎役者や芸人たちが、甲府の芝居小屋で役を仕上げて東京の公演に臨んだ、と聞かされると、明治年間から大





正期にかけての人の往来が激しかった甲府の古い
桜座が懐かしく思い出される。

復活桜座に県外の客も増えたが：

甲府中心市街地活性化の目的で、甲府商工会議
所より委託を受けたNPO法人街づくり文化
フォーラムが運営にあたり、二〇〇五年六月二十
五日、桜座は復活した。

百坪のスペースの半分は舞台、収容能力二百席、
エントランス部分はカフェ、最近では年間二万人
動員にまでになった。

田中泯（舞踊）をプロジェクトリダーに据え、
年間計画等の方向性を決める。スタッフには多く
のボランティア、市民の協力で復活から八年目の
現在では、演劇、落語、音楽全般、講演、映画、
大学の講座、甲府中心市街地活性化フォーラムな

ど、年間百以
上の公演開催
するまでに
なった。
最近では県
外からのお客
様も増え、全
体の三割が近
県から来られ
るお客様であ
る。
山梨県の人
口は約八十万
人、東京都の

お隣で電車で来れば一時間半程度の距離である
が、お客様の動員はなかなか大変である。都心とも
近いだけに、逆に大抵のことは東京で用は足りて
しまい、中途半端な位置関係なのである。

ただ、桜座の観劇に来られるお客様からは「東
京で観てファンになった」という声も聞かれる。
これらのお客様は県外での出会いがきっかけに
なっているようである。

「桜座オリジナル」を増やす

このことから、「桜座オリジナル」で、逆に桜
座でしか観ることができない演目や公演などの比
率を高めよう、と考えている。山田洋次監督公演、
永六輔、山下洋輔、渡辺貞夫、日野皓正、樹木希
林、柳家喬太郎といった、多数の表現者にもご協
力をお願いした。

当委員会のプロジェクトリダーである田中泯
（舞踊）のハリウッド映画出演やロケも終わり、
ロードショーが楽しみである。いずれにしても、
文化的事業であるだけに、不断の取り組みによる
見えない成果を得るのには、時間がかかるもの
である。

桜座は復活し、甲府の、日本の、世界の文化に
浸り、浸され続け、私たちの現在に新鮮な「記憶
装置」として生き続け、変わり続けるだろう。ま
た私たちは、このプロジェクトにより、七十八年
前の桜座がそうであったように、甲府の町、ひい
ては山梨県が、より一層活気溢れ、文化薫る地域
にならんことを夢見て取り組んでいる。

演劇が過疎の村に活力もたらす —世界演劇祭等で得た自信が村民を変えた—



富山県利賀芸術公園 園長 ● 野原順作

かつては、鳥も通わぬ深山幽谷の秘境の地といわれた利賀村（平成十六年十一月町村合併により南砺市となる）は、昭和二十年代後半までは、養蚕、和紙、木炭等の生産が盛んであった。しかし、

予想を上回る経済の高度成長はこれら第一次産業の就労人口を都市に吸収してしまい、急激な人口減少がはじまり、全国稀に見る過疎の村となった。

旧早稲田小劇場主宰との出会い

第一次産業の衰退により失われた活力を再び呼び戻し、新しい村づくりをするために手掛けたのが都市交流による振興である。しかし、ただ広大な自然があるだけで、魅力ある文化遺産や特殊性のある観光資源に乏しい村では、豊かな自然だけでは都市住民は呼べないことを知った。

暗中模索の中から一抹の光明を見つけたのが、昭和五十一年に劇団スコット（旧早稲田小劇場）主宰鈴木忠志氏との出会いである。鈴木氏は当時、東京で演劇活動をしておられたが、文化をはじめ

すべてのものが中央集権していることに非常に批判的であった。

鈴木氏はまた、常々「都会の劇場はすべてがヨーロッパを模倣した多目的ホールとして造られているため、演じる人と観客が真に膚を触れ合い感動し合うことができない。これらのことが日本の演劇を衰弱させている。従ってもはや都会での演劇活動は限界にきている」と考え、東京での活動に一つの見切りをつけ、新たな演劇空間を利賀村に求められたのである。

以来、昭和五十一年から平家の落人民家で知られる利賀村の合掌家屋を改造してできたユニークな劇場「利賀山房」等を拠点に、三十六年間の長きにわたり利賀村で演劇活動をしてこられたのである。そのことは、過疎に悩む利賀村のその後に大きな活力を与えてくれた。

その一つとして、世界演劇祭を交流の絆としたギリシャのデルファイ市との姉妹都市盟約を鈴木氏の仲介により、アポロンの神殿が見渡せる紀元前五世紀末に建造された万古不易の荘厳な古代競技

場において、締結することができた。

このことを契機に、利賀中学生の修学旅行は毎年ギリシャに派遣するようになり、南砺市になった現在も続けられており、子供たちに大きな夢と希望を与えてくれた。

若者たちのUターンの契機にも

そして何よりも大きかったのは、豪雪地帯で五カ月近く雪で閉ざされる厳しい自然条件と戦いを続けてきたため、閉鎖的で暗かった村のイメージアップが大きく図られたことである。このことは、村の若者や村を離れて都会で生活している若者たちの村を見る目を変えさせ、職場があれば村へ帰りたいというUターン志向も表れた。

また、世界演劇祭などの取り組みで得た自信は村の職員や若者の意識を変えさせ、様々なことに積極的に挑戦するようになった。その一つとして



野外劇場



「シラノ・ド・ベルジュラック」の一場面



「リア王」の一場面

村で開催している「そば祭り」の集大成として千人に満たない小さな村で一カ月間にわたって「世界そば博覧会」を開催した。

さらに「そば」を絆に、姉妹都市盟約を締結した人口五百人余のネパール国ツクチェ村とカトマンズにおいて、両村からそれぞれ六十名の村人が集い、国際交流の一環として「村おこし交流展」をネパール国の副首相ご出席の下に開催した。

一方、鈴木氏は平成六年に県立化された利賀芸術公園を拠点に、演劇活動을 続けながら活動の場をさらに広げるため、(財)国際舞台芸術研究所を発展的に解散し、平成十二年に(財)舞台芸術財団演劇人会議(理事長は平成二十二年に鈴木忠志氏から平田オリザ氏に交代)を設立された。

◆◆◆ 利賀フェスティバルでは 世界の優れた舞台作品を紹介

そして世界中の優れた舞台作品を紹介してきた「利賀フェスティバル」から、さらに未来を見据えた新しい方向を目指すため、「利賀サマー・アーツ・プログラム」と名称を変更され、芸術活動の創造と招聘だけでなく、人材の育成、支援、交流などの活動を主体とするようになった。

そして新たな事業として、利賀芸術公園の特徴を生じた舞台芸術体験プログラムである。演劇を行う者、観る者、学ぶ者が一堂に会して様々な演劇の可能性を探る場として、プロの演出家を養成する「演出家コンクール」や、「大学生創作ワークショップ」「高校生夏期演劇講習」「利賀演劇塾」やシンポジウムなど、舞台芸術の普及教育事業等を舞台公演に併せ開催するようになった。

また鈴木氏は、平成十六年にロシアのプーチン大統領とクレムリンで会談され、両国の政治家や芸術家・文化人及び報道機関の代表者で「日・露文化フォーラム委員会」を結成され、平成十八年に富山県でその委員会を開催し、利賀芸術公園では記念行事が行われ、大きな反響を呼んだ。

このように鈴木氏の長年にわたる演劇活動により、国際的にも「演劇の利賀」として知られ、世界一流の舞台芸術家が訪れる「演劇の聖地」として高い評価

を受ける場所となった。しかし、鈴木氏は常々、日本には諸外国のように「劇場」について社会的な価値を示す根拠法となる「劇場法」が存在しない。このことから劇場が多目的ホール等、一般集会施設と同様に、防災上危険な場所として誘導灯など、火災予防対策を中心に芸術性を全く考慮しない様々な法規制を受け、舞台芸術を阻害している、とよく言われる。

◆◆◆ 「舞台芸術特区TOGA」の認定を受ける

このことから、平成十八年に鈴木氏の指導のもとに富山県と南砺市が申請し、「舞台芸術特区TOGA」の認定を受けた。

これにより、劇場における誘導標識等に関する基準の特例適用事業の摘要を受け、それにより演出家等の専門家が創造能力を発揮できる舞台芸術専門劇場としての環境が整った。そして新たに国際的に通用する舞台芸術人材育成事業や国際的な演劇祭の開催、また国際共同制作等による芸術文化の創造に取り組むこととなった。

マスコミ等によく「演劇活動と村づくり」について尋ねられると鈴木氏は、「月は一つ、分け登る麓の道が多いだけ」とよく言われていたが、利賀村にとつての三十年余の村づくりは、まさに鈴木氏との二人三脚あったように思われる。

平成二十五年に開催される芸術のオリンピックといわれる「第六回シアター・オリンピック」が北京で開催され、その一部が利賀で開催することになった。今年からは、村民挙げてその成功に向けて小さな力を結集していきたい。

能登演劇堂から全国へ文化発信 —演劇を地域の文化資源として育てる—

七尾市中島町公益財団法人演劇のまち振興事業団 ● 山下澄子

「無名塾」の芝居が見たい！

日本を代表する俳優仲代達矢さんが、奥様の隆巴さんとお母様との家族旅行で能登を訪れたのは一九八三年のことだ。初めて来たこの地をお二人はとても気に入られた。

「この恵まれた自然の中で芝居の稽古ができたら…」という思いを中島町が受け止め、仲代さんが主宰する無名塾の能登中島合宿が一九八五年に始まった。その時から、演劇文化という新しい文化が過疎の地に芽生えていったのである。

そして、交流が始まってから十年。地元で「無名塾の芝居が見たい！」という町民の願いが現実のものとなり、一九九五年、演劇専用劇場「能登演劇堂」がオープンした。

「芝居小屋にはシャンデリアも大理石もいらない。役者の汗や表情が手に取るようにわかる劇場がほしい」というのが、建設にあたり監修をいただいた仲代達矢さんの思いである。芝居小屋感覚

の劇場、それが能登演劇堂である。

「能登演劇堂」という名称は能登から演劇文化の発信をしたいという願いがこめられている。その夢の実現のために向けた営みを課題として、能登演劇堂は歩み始めた。

能登演劇堂を主体とした演劇文化を地域の文化資源として育て、地域のブランドにしようという取り組みは、「文化によるまちづくり」として全国的に注目され、多くの支援を得てきた。

オープンから16年、4度の長期公演

能登演劇堂がオープンから十六年、劇場の力量を高めるため四度の長期公演を開催した。「みんなで汗をかこう！」をスローガンに、プロのコンサルタントなどに委託することなく、運営から集客のための営業などすべてを無名塾と提携しながら自前で取り組んだ。

一九九七年に開催された第一回能登演劇堂ロングラン公演「いのちぼうにふろう物語」は、「演

劇の町」の全国発信と能登演劇堂の周知を目指すものであった。人口七千人しかない小さな町の大胆な試みは、「小さな町の大きな挑戦」と評価され、演劇の町をイメージさせる仕掛けづくりの第一弾であった。三十回公演で二万人を集客した。

二〇〇一年。第二回のロングラン公演「ウインザーの陽気な女房たち」はコセンプトを「周知から認知へ」と掲げ、能登で観る演劇の魅力発信し、広域的滞在型誘客に努めてきた。二十回公演で一万五千人が訪れた。



能登演劇堂の内部



能登演劇堂の外観



いのちぼうにふろう物語の一場面



能登限定で公演された「マクベス」

広域的、滞在型公演をキーワードに、出演する仲代達矢、若村麻由美両氏の強力な支援を得て全国的な誘客に努め、県外からも一万人を能登へ招き入れ、社会的な効果と大きな経済波及効果をもたらした。

能登へ人を招く魅力の創出は、演劇文化が地域に根を張り、地域住民がその文化を享受するとともに、広域的誘客による賑わいが地域へ社会的、経済的波及効果をもたらしていく。

今後も演劇専用ホールとしてのミッションを意識しつつ、能登の地より演劇文化を発信し続け、演劇のまちを感じさせる新たな仕掛けをつくりながら、演劇文化を地域のブランドに育んでいく努力を重ねていかなければならない。

昨年、能登の里山里海が「世界農業遺産」に認定され、図らずも能登が注目を浴びることとなった。自然の風土に恵まれた地に立つ能登演劇堂。世界農業遺産とともに「能登のお宝」として、市民の誇りとなることを願う。

しかし、この頃から、長期公演の成果が演劇堂公演の観客確保に連動しなくなってきた。演劇堂友の会の減少傾向、一般公演の集客率の伸び悩み等、新たな演劇人口の掘り起こしに課題が生じてきた。

演劇人口の掘り起こし等の課題も

二〇〇四年。新七尾市誕生祝賀公演として「第三回ロングラン公演」を開催した。合併により中島町が七尾市となり、演劇文化によるまちづくりを支えるサポーターは、人口七千人から六万人になったことに大きな期待を寄せながら、優れた舞台芸術の公演事業を行い、多くの観劇客を迎えてきた。

観劇会員の減少は、全国的にもその風潮があるといわれるが、演劇文化を地域ブランドに育むためには、市民が演劇のまちと感ずる実体がなければならぬ。演劇のまちのイメージをさらに深化させるため、二〇〇九年に第四回能登演劇堂ロングラン公演を企画した。

この企画は、無名塾「マクベス」を能登限定で五十回上演するもので、「能登からの演劇文化発信」をコンセプトに、①能登へ人を呼ぶ大型公演、②来なくなる魅力の創出——をスキームとして実施した。

公演は能登演劇堂の特殊な舞台機構を十分に使い、馬が六頭、市民エキストラ延べ二千七百人が出演するという豪華な舞台となり、三カ月にわたり約三万三千人の観劇客を能登へ迎え入れた。

た。

「文化的な活動は、継続が必要です。皆さんの思いが本当の演劇への、文化への愛、郷土への、人間への愛として実を結ぶまで、ともにがんばりましょう」。仲代さんが、能登演劇堂オープンの時に贈ってくださった言葉である。

演劇文化を地域ブランドに育む努力

これまで能登演劇堂は、仲代さんの名声と適切な助言に支えられて実績を積み重ねてきた。四度のロングラン公演を通し、何が優れており、何が他にはない魅力なのかを明確にしなから、新鮮で感動的な演劇との出会いを提供し、能登演劇堂の魅力を全国に発信してきた。

能登へ人を招く魅力の創出は、演劇文化が地域に根を張り、地域住民がその文化を享受するとともに、広域的誘客による賑わいが地域へ社会的、経済的波及効果をもたらしていく。

今後も演劇専用ホールとしてのミッションを意識しつつ、能登の地より演劇文化を発信し続け、演劇のまちを感じさせる新たな仕掛けをつくりながら、演劇文化を地域のブランドに育んでいく努力を重ねていかなければならない。

昨年、能登の里山里海が「世界農業遺産」に認定され、図らずも能登が注目を浴びることとなった。自然の風土に恵まれた地に立つ能登演劇堂。世界農業遺産とともに「能登のお宝」として、市民の誇りとなることを願う。

わがまちへの「自負と愛着」を発露 ——しみん劇が住民の意識回復に効果もたらす——



ちりゅう芸術創造協会 事業係 ● 芹澤由貴

ちりゅう芸術創造協会は、一九九九年十月に発足し、翌二〇〇〇年七月に開館したパティオ池鯉鮒（知立市文化会館）の管理運営に関わってきた。二〇〇六年四月からは、指定管理者として知立市より指定を受け、施設管理・文化事業を展開し、芸術文化の拠点として地域に貢献すべく活動している。

文化事業では、二百七十年の歴史を持つ国指定重要無形民俗文化財「知立山車文楽・からくり」を礎に、人形を駆使した舞台芸術をはじめ、演劇・音楽・ダンス・伝統芸能など、各芸術分野の均衡を意識し、幅広い芸術分野の事業に力を注ぎ、それらの事業に取り組む出演者・観客・スタッフの年齢層の調和も意識して事業を展開している。

ボランティアが市民と会館の架け橋に

文化会館を「市民の顔なじみの文化施設」とすべく組織されたホールボランティア・パティオ・ウェーブは、市民の力・市民の目線で文化事業

を支え、市民と会館の架け橋としての役割を担っている。メンバーにとっては、職場や家庭以外の場所所得た「居場所」は新たな生き甲斐となり、他者との交流や活動は、希薄だった市民意識の回復に効果を発揮している。

また、ボランティアがフロントスタッフや舞台技術・美術スタッフとして文化事業に参加することで、未知や無関心のために文化芸術を敬遠しがちだった市民の間に、口コミで情報を展開することが可能となっている。

「しみん劇」のはじまり

市民参加型の演劇公演「しみん劇」の企画に初めて取り組んだのは、文化会館が開館した二〇〇〇年である。山車文楽・からくりを題材に創作戯曲が生まれ、伝統芸能の保存に取り組む人々、地元のお舗社会人劇団、演劇人、市文化協会等文化団体、ホールボランティアなど多くの市民の力が結集し、そこに芸術家の指導や助けを得ての成立



台本を片手に、ホールボランティアの打合せ風景

だった。

出演者・スタッフともに右も左も分からないなか、幾多の社会を背景に、多様な人と人、他分野の技と技、多くの人々の気と気のぶつかり合いを経て、舞台芸術を築き上げた達成感は、多くの感動を生んだ。そして、その体験の伝搬が観客である家族や友人に感動を生み、その感動がまた次の未来を見据えた舞台を生み出すという創造サイクルになっている。

地域住民になじみやすく、より愛される舞台にするために、近年では、地域住民と芸術家がバランスよく参加し、互いの潜在能力を引き出せるような相乗効果を狙った事業展開を意識して企画している。

二〇一一年に十一回目を迎え、一回目から数え



第11回しみん劇より 出演者の登場で大きな拍手がおこった



第11回しみん劇より 観客を巻き込んだ活気ある劇場空間

て延べ七千五百人の出演者・スタッフ・観客と地域活性化の想いの共有化を図った。

演劇は、観客と役者、役者と役者、役者とスタッフなど、多様な関係性によって出来上がる。様々な職能を持った人たちが、それぞれの分野で持てる力を発揮できる場所でもある。

まちづくりを良い方向に刺激する

舞台空間が、多層的ないし多元的になるためには、同じ空間に存在するすべての人が想像力を駆使し、相手の意を汲みとり、理解しようとする意識を持つことが大切である。

「相手に自分の伝えたいことを理解してもらうにはどう表現したら良いか」を考えることも重要

である。また、舞台で台詞を忘れたり、段取りを間違えたり、突然の怪我や病気になる時、それを単に相手の過失や自分だけの問題とするのではなく、どうやって補い合いながら舞台を続けていくか、具体的に解決するか。役者・スタッフとなった市民は、表現すること以外の緊張感とも真剣に対峙しているのだ。

しみん劇への参加により、相手を思いやる気持ちや、支え合っているという信頼感がつながった市民たちは、舞台を離れた後も、地域のなかでその経験を活かしながら生活している。まさに、自然体で地域のつながりを強化する役割を果たしている。

人と人との関わりによって成立する演劇は、未来の社会のあり方に提言し、社会に語りかけ、まちづくりを良い方向に刺激する機能を持っている。

その機能は住民が心豊かに暮らすことのできるまちづくりのきっかけや一助として有効だ。

生まれた地域や、生活してきた環境によって、個人の考え方や文化が異なることを理解し、その事実を認識するのは、私

たちが実りある人生を営むために大切なことである。そうした意識の涵養を促すためには、そこに暮らす一人ひとりが社会と関わり、他者と交わる機会が重要だ。

しみん劇は、知立市や近隣市町の共同意識が回復され、「わがまち」の魅力に対する自負と愛着が顕在化された一つの姿でもある。

今まで見えなかった地域ニースを発見

しみん劇の参加者は、小学生から主婦や社会人現役世代、リタイアした中高年まで様々である。中には、遠方から移住し数年間地域との関わりのなかった人、何十年ぶりに地元へ戻ってきた人、人生の集大成の場を探してきた人もいる。

多くの人々が、自分の意思で新しい一歩を踏み出し、豊かな生活空間の再形成のために人知れず努力を重ねているのだ。

参加者は、自分自身を模索し、何らかの方法で社会貢献のために力を発揮しようとしている人たちであり、そういった意識や潜在能力を持った市民の発掘・育成も重要である。

そこに前述したボランティアも加わり、地域の活性化をさらに促している。

それらの人たちの手を取り、つなぎ合わせてコミュニティを開き、小さな種まきを継続していくことが、個々人の「居場所」確保による生き甲斐づくりや生活力向上につながるとともに、生き生きとした市民の暮らすまちづくりにもつながっていく。それが演劇の可能性であることを深く認識し、今後も演劇事業を継続していく。

山城〴〵ごくみん劇〴〵がもたらした絆 ―地域初の市民劇がコミュニティを変革―



NPO法人山城こみねつと理事

大橋敏裕

魂をゆさぶった〴〵ごくみん劇〴〵

昨年の八月二十一日、宇治市文化センター大ホールは歓喜と感動に包まれた。京都府南部で開催した市民劇「ホテル茶の湯へ いらっしやーい！」公演本番でのことだ。

舞台には小学生から七十歳代のお年寄りまで数十名が登場、観客席にはホール駐車場が満車になるほどの観客が詰めかけた。廃業寸前のホテルの惨状とその立ち直りを描いたこの舞台が観客を突き動かし、劇場は興奮に包まれ、この地域初の市民劇はみごとに成功を収めた。

この成功は決して自画自賛ではない。その証拠にアンケートには半数を超える方々が自分も「舞台に立ってみたい」と答えて下さったし、用意した音楽CDには予想を大きく上回るカンパが集まり、在庫は一瞬でなくなった。

戦国時代に住民自治が行われたことで知られる京都府南部に生まれたこの「山城〴〵ごくみん劇〴〵

はあの日、間違いなく出演者と観客の魂を強くゆさぶったのだ。

実を言えば難事業だった…

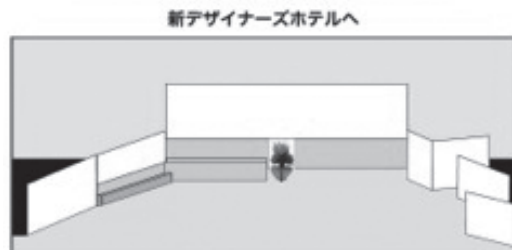
同様の取り組みは、全国各地に見られるかもしれない。だが、この京都府南部地域においては元々、実施上困難な条件が存在していた。

それはこの地域が小さな市町村が点在する地域だからだ。最も大きい宇治市ですら、二つの鉄道会社が別々の地域に乗り入れているため、市民の生活圏は分かれてしまっている。こんな地域で一カ所に人々が集う、しかもそれが演劇でとくれば、事業実施が困難であるのは必至だった。

この難事業への取り組みは、一昨年九月に行った私たち「NPO法人山城こみねつと」のミーティングでの提起から始まった。私たちは長期間をかけて多くの人と出会い対話をし、立ち上げに向けた呼びかけを行った。

私たちの呼びかけに、市民ミュージカル劇団の

ステージのデザイン図



方々をはじめ、小中学生や高校生、特別支援学級や支援学校で学ぶ生徒も出演を希望してくれた。作曲家や振付家も快く協力してくれたし、京都府や茶業関係者の団体である京都府茶業会議所、茶協同組合も後援して下さった。

ちらし配布やポスターの掲示の協力をたくさんのお店にお願いして回り、多くのお店が協力してくれた。また宇治市観光協会も協力して下さり、周辺自治体と各教育委員会も後援をし、多くの学校が私たちの要請に応じてチラシ配布に協力して下さった。大人数での練習は会場取りや連絡調整も大変だったし、スタッフとしての仕事も多かったが、私たちはおよそ半年間、運営に没頭した。こうした努力が実って、初の市民劇〴〵ごくみん劇〴〵は誕生したのだった。

〴〵ごくみん劇〴〵 実現への原動力

この企画成功のための努力を支えた原動力は、



上演と並行して行ったワークショップの様子

次の三つだった。

①「演劇の良さに気づいてもらうべきだ！」

みんなで練習を重ねる、「人格も世代も、障害をも越えて協働できる場」、それが演劇だ。また演劇は、出演者、スタッフみんなで一つの物語を語る「語り部になれる場」だ。さらに演劇は、特別な機材や、道具、技術はいらず、となりのおばさんも手軽に「表現者になれる場」である。しかも完成への過程で、創造的かつ深いコミュニケーション必ず経験する。

②「演劇はもっと活用されるべきだ！」

便利な世の中では、演劇は「めんどくさい」ものなのだろう。地域で演劇活動をする市民グループはほとんどなく、小学校の演劇クラブも同様だ。しかし、そもそも演劇はコミュニケーションその

ものの芸術であり、コミュニケーション力不足が叫ばれて久しい今の時代にこそ、注目され活用されてしかるべき芸術だ。

③「表現力も人材も眠っている」

私たちは学校で演劇ワークショップ授業をしている。子どもたちは物語を作り演じることをとても楽しんでくれる。こくみん劇を見れば、大人だって変わらなことがわかる。人々の身体に眠っている表現の喜びを呼び覚まし開放すべきだ。

これらの思いを胸に、私たちはこくみん劇に取り組んだ。

こくみん劇は、地域産業である宇治茶との関わりを大切にして企画しており、物語でもホテルの復興のカギは茶にちなんだ新製品の誕生だっ



私たちが行っている学校でのワークショップ授業の様子

た。こくみん劇は観る人に郷土への愛着や誇りを呼び、上演後、宇治市文化センターとの共催の話が持ち上がり、宇治市商工会議所との新たな関係作りも視野に入った。

また上演後、いくつか新しい劇団が誕生した。小さな地方都市が点在する地域では、考えられない変化だった。これらの活動には中学生や高校生も参加しており、こくみん劇は新たな絆だけではなく、舞台芸術の新たな担い手も誕生させたのである。

新しい息吹の胎動、 その先の地域変革へ

多くの成果を生んだこくみん劇だが、私たちはその発展、充実だけを願ってこの活動を行っているわけではなく、次のように考えている。

こくみん劇に関わった方々(上演側も観客も)が地域へ広がり、様々な演劇活動に関わりはじめる。そうした人々のまわりにさらに演劇に関わる人の輪が広がる。私たちも演劇フェスティバルを企画するなどしてこうした演劇活動を支える。

以前より多くの人々が再びこくみん劇に集まる。この積み上げにより地域や学校に演劇文化が浸透する。そして地域に演劇を活用したコミュニケーションとそのネットワークがはりめぐらされるようになり、地域は創造的なコミュニケーションを生む場所へと変わっていく。

私たちは今、そんな地域変革を見据えて、こくみん劇や学校でのワークショップ授業、放課後ワークショップスクールなどの様々な事業を展開していこうと考えている。

50年超える参加型の市民劇場 —暮らしやすい街に必要な生の舞台を育む—



広島市民劇場 事務局長 ● 井上邦枝

戦後の廃墟から生まれた演劇鑑賞団体

広島には戦前から、寿座や新天座などの劇場があり、「演劇を観たい」という幅広い観客がいたものの、一九四五年八月六日の原爆で跡形もなくなり、文化というものは根底から壊れてしまった。それでも、生の演劇に対する要求は死んではいない。終戦の翌年の十月にはすでに地元にあった広島舞台という劇団が、廃墟の中で『嬰兒殺し』を上演している。

しかし、演劇の鑑賞組織そのものは当時存在しておらず、「自分たちの住む街で、継続的にプロの演劇を観たい」という根強い要求が、演劇愛好家の声を一つに集めて鑑賞組織を作る準備が進められた。そして、一九五九年十一月一日にわれわれの演劇鑑賞団体「広島市民劇場」が創立されたのである。

翌一九六〇年の二月の準備例会を大成功させ、その五月に発足例会として劇団民芸の『ジュノー

と孔雀』で正式にスタートした。

誰からも財政的な援助を受けず、もちろん行政からの援助もスポンサーもない。会員が持ち寄る月々の会費だけで運営する、自主的で民主的な演劇鑑賞団体の誕生であった。

それから今年で五十二周年を迎える。

その道のりは常に赤字との闘いであったが、年間六回の演劇公演（全会員が集う定例会）を継続的に実現してきた。この「演劇鑑賞運動」の歴史は諸先輩から受け継いだ「この広島の地で、良い演劇を安く、自分たちの手で実現していく」運動を続けてきた歴史でもある。

現在、年間六回（二カ月に一回）、中区と安佐南区の二つのホールを使い四日間公演を行っており、五百近いサークルに所属している三千人の会員が舞台から届けられるメッセージに泣いたり笑ったり、時には怒ったりしながら、心から観劇を楽しんでいる。

サークル・会員が主人公の 演劇鑑賞運動

この組織的な原動力は、なんといっても五百近い数のサークルにある。自分たちが観たい演劇を自分たちの話し合いで選び、自分たちが運営する例会作品も自分たちで決める、サークルの自主的な運動である。

毎年七月頃、翌年の公演演目の希望作品を選ぶと同時に、翌年の年間六回の例会を希望して運営するのがサークル集会である。

この時期には、東は東広島市、西は山口県の岩国市まで広がって存在している各サークルが、公演演目の希望と運営担当をする作品の希望を決める集まりをそれぞれもっている。飲み会をしながらのサークル、お茶をしながらのサークル、中には温泉旅行をかねて集まるサークルもあり、ワイワイガヤガヤと話し合いがもたれる。



座席割りの作業は真剣に



ロビーでのパン販売も会員の手で



舞台写真加藤健一主演「木の皿」



市民劇場の入会案内チラシ

このサークルは職場サークルや地域のサークル、友人同士のサークルなど様々であるが、それぞれ職場も地域も性別も年齢の制限もない対等平等なつながりのサークルである。

年間六本の例会作品のうちの一本を自分たちで選び、例会を迎える準備から例会当日の会場の管理、開演中の仕事まで四十〜五十のサークルが主催者となって運営に当たるのが「運営担当サークル」である。

全サークルの希望に従って座席指定をする席割り作業から、公演当日舞台道具や衣裳、照明・音響機材などをトラックから舞台に搬入する作業、会場でおなかをすかせて駆けつける会員のためのコーヒー、パンの販売まで、お互いがお互い会員の立場に立って一本ずつの例会を成功させよう、と事務局に集まって話し合いを重ねる。

これを運営担当集会と呼んでいるが、様々な地域・職場から集まってくる

る色々と個性豊かな人間が集まる話し合いの場は「大人の民主主義学校」と呼んでいる仲間の連帯を作り上げる場となる。

具体的な作業や仕事のほかに、この集会で話し合われる中心テーマはどれだけ会員を増やして劇団を迎えるかにある。五十年を超える歴史の中で、どれだけ有名な俳優が出演しようとも色々な事情から退会する会員が出るのが常で、その退会者はどう回復し「前例会をクリア」するかである。

これは、会員が減っていくれば財政事情にすぐ影響が出ることもあるが、何よりもこの広島に地味で優れた演劇を観て、心豊かな人生を送る仲間を増やそうという「演劇鑑賞」という自分たち自身の文化的な運動でもあるからである。

こうして、毎例会担当になったサークルは、街のあちらこちらで「一緒に演劇を観ましょう！」と働きかけられ、「誘ってくれてありがとう。こんな世界があるって知らなかった！」と感謝され、誘った側も誘われた側もどちらもが嬉しくなる活動が続けられている。

最近では、どの団体も高齢化が進んでいるが、広島市民劇場もその例に漏れない。しかし、最近の市民劇場には、誘い合う中で家の中にこもっているのではなく、元気に明るい老後をエンジョイしている会員が増えてきている。

劇団と鑑賞団体が、車の両輪

われわれが公演する舞台は、戦前から活動していた劇団も含め、全くの非商業主義的な演劇創造をしている劇団が中心である。劇団があつてこそ演劇鑑賞団体であつてみれば、より良い舞台を届けてくれる劇団の再生産を保証し、支えることも大きな任務の一つでもある。

具体的には昨年四月から、中国地方の十三の都市・地域で一緒に鑑賞運動を進めている「中国地区演劇鑑賞団体連絡会議」で取り決めた「上演料算出方法」がある。これは「前例会をクリアした会員数×二千元を制作協力金として劇団に還元する」取り決めである。「会員を増やして上演料を増やす」ことで、日本演劇を支え続けてきた劇団と一緒に良い演劇を作り続け、観劇し続けようというものである。

人間らしい人間が暮らす街を作るには、文化の力なくしては成り立たない。それも生の舞台から発信されるものを受け止め、語り、広げていくことこそ地域が文化的になり、元気に活性化されていくのではないだろうか。

そのためにも、もっともっと多くのサークル・会員が広がることでより広く、強くなっていくことを願っている。

保健師が立ち上げた「もんてこい劇団」 — 10、70歳代の住民が高齢過疎問題に挑む —



徳島県那賀町保健師

● 蔭岡美恵

東京で劇団の旗揚げ公演

那賀町は、徳島県の六分の一の面積がありながら、その九五%は森林という山深い町である。作家の内田康夫氏が以前、「まるですり鉢の底にいるような」と表現したように、山あいを流れる那賀川に沿って国道が続き、所々で集落が肩を寄せ合い暮らしている。

一昨年の国勢調査で人口は一万人を切っており、このまま減少が続くと、十五年後には今の半分になるだろうといわれる「高齢過疎の町」である。こんな町に三年前、東京から保健活動取材するジャーナリストの荘田智彦氏が訪れた。

荘田氏は、町ぐるみの健康づくりのことより、「見回せば雑草に覆われた棚田、何年も人の手の入らない山、子どもの姿の消えたいくつもの廃校。日本中に見られるこの風景、この沈黙」と、この町にこの国の先行きを重ね合わせ、「このままでいいの？三年の元気を担保に応援するから、都会に出て行った子供達に戻ってこいと言おうよ」と、三年という時限つきの「爆弾」をセットして帰っていた。

それから一年間、町と町づくりに関わる団体を含むもんてこい運営委員会（もんてこいは「戻っておいで」の意味）を立ち上げ、毎月検討を重ねた。その結果、一回目のふるさと交流会は東京で、二年目の第二回を地元那賀町で、三年目の平成二十三年度は大阪で開催することになった。

交流会の内容を検討する際、故郷を懐かしんでもらえる「郷土料理」、伝統芸能の「人形浄瑠璃」や「阿波おどり」、ふるさとからの「ビデオレター」などの案が浮上したが、「町の窮状を訴え、参加してくれた出身者の心を動かすには演劇しかない」と、つい提案してしまった。「それはいいかもね」と、あっけなく承認された。

文学部でも演劇科出身でもない、看護学校しか出ていない私に舞台なんてつくれるの？と、後悔したが、覆水盆に返らず。とりあえず脚本をということになり、Ｉターン、Ｕターンした人に取材

に行き、高齢者が三人集まっていれば首をつっこんで話を聞いて回り、原作を書き上げた。

一年目の

東京品川
キュリアン

の会場は、間口二間ほどの小さなステージで与えられた時間も二十分と少なかったため、原作から「東京番外編」を作り、上演した。役者は運営委員の有志たち、演出は私の友人で市内で劇団をやっている人にお願ひし、こじんまりだがあたたかい舞台を団員八人で作り上げた。

二年目の舞台は、地元の大きな体育館だった。動きが小さいと何をやっているのかわからないから「ミュージカルのようにストーリーに歌とダンスを入れないか」と思いが伝わらない」と考えた。曲を外注するお金はないので、詞は自分で書き、曲は「ピアノ習っているから大丈夫！」と六年生の長女に頼んだ。

◆ ◆ ◆
那賀町の良さを再発見し
自信をもつてもらう

お客さんは町民が多いので「那賀町の良さを再発見し、自分の町に自信をもってもらおう」ことを強調した脚本に書き換えた。願いは届くもので、



2009年 東京公演

偶然にも劇団ふるさとキャラバンの元プロデューサーが、その年に緊急雇用で町にやって来た。

まさに神様のお引き合わせ。彼女は、演出振り付けをし、音響照明に必要なスタッフを集めてくれた。役者は一般住民。イチゴ農家の青年や主婦や婆ちゃんたち。素人だけど、毎日をしつかり田舎で生きている人たちだ。地元の小学生にもラストのコーラスで出演してもらった。

しかし、稽古を重ねるごとに殺気立っていた。「動くときセリフ忘れる」「歌が覚えれん」「踊るとき足が反対に出る」と、役者たちは悲鳴を上げる。本番が近づく稽古は、日付が変わる間際までみな帰ろうとしなかった。

なぜこんなに必死なのか？その理由は、今回はミュージカルで歌も踊りもあるということ。元劇団にいた方に本物の舞台づくりや演技の指導を受けているから気を抜けないこと。でも、それより何より、自分達の思いが詰まっていること。

実は今回、台本を再構成するときに制作部と役者の間で激論になった。「せっかくだからセリフを変えられたら、もうできん！」と役者たちは口々に言った。しかし、舞台と観客が共感する場面を多く作りたいことを伝え、六人の役者たちとゆっくり話し合った。六人は、那賀町に点在して暮らしている。合併により、過疎の条件が異なる五つの町村が一緒になったので、六人の暮らす環境も考え方も様々だ。

例えば、米作りについて問えば、「経済」と答える人もいれば、「家族の命を育んできたもの」と答える人もいる。荒れた田を見て「何かに使える」と考える人や「胸がつまる思い」と思う人も。

「私が、もってこい」に協力したんは、里（町内でも山奥にある）に帰っても、子供が遊ぶ姿が見えんのよ。いつの間にか、小学校の全校生徒が十三人になっとなつて、淋しいなあ、なんとかならんのだからって」という人もいた。

こうした本音のやり取りは、稽古を一回つぶしてもとても尊い時間となった。その次の稽古のとき、台本二ページを新しく差し替えたが、誰ひとり文句を言う役者はいなかった。その新しいページが自分達の、ことばで埋められていたからだっただと思う。

◆ ◆ ◆ 団員八人から二十九人の大所帯に

三年目の舞台は大阪。東京の郷愁とは異なり、距離が近いだけに「何を伝えればいいのか」悩み、大阪在住の町出身者を取材し、その思いと、ふるさとを守る年寄りたちの日常を盛り込んだ新作を創った。団員二十九人の大所帯に成長したもってこい劇団は、観客の笑いと涙と感動をさらった。

その三週間後、木頭地区の産業文化祭で凱旋公演を行った。木頭の舞台は小さいのでプランの作り直しから始まったが、団員一同頑張ってくれた。昨年同様、満席で立ち見のお客さんもあった。客席が近かったので、お客さんの泣いている顔を見て、歌いながら役者達も

泣いていた。終わった後、私はステージに引っぱり上げられた。

「このミュージカルを見て、良かった感動したと皆さん言うてくださいますが、それで終わったら私達の努力は報われません。見て、心が動いたら行動に移してください。みなさんの子や孫に『もってこいよ！』と言ってください。皆さん一人ひとりに町を変える力があることを知ってください。私達も頑張り続けますから」と、無意識に偉そうなことを口走っていた。

後に、会長のとこに一本の電話があった。「わし、子どもに『もってこい』って言うてみようと思う」。娘の学校の先生も、娘に宛てた手紙に「お正月にある同窓会で、同級生たちに『もってこい！』って言うてみる」と書いてあった。

ただ、見てもらうだけでなく、これからは上演の成果も見えていきたいと思います。大衆の心を癒すだけでなく、人生をも変える力が演劇にはあることを信じている。



2011年 大阪公演



木頭公演に向け背景幕を制作

生活劇で日常の矛盾をあぶり出す —男女共生社会の住みよいまちづくり目指す—

ほりだし劇団代表 ● 吉良鶴雄

誕生して10年、意識改革の啓発劇

ほりだし劇団は、ト肥後の平野の中どころと歌われているほど周りを田んぼに囲まれ、東に世界一のカルデラ阿蘇山を仰ぎ見る風光明媚なところに在している。メンバーは男性三名を含む十六名から成る。

「男女共同参画基本法なんて口ばかりたい」という周囲の意識の低さや、農村地区に根強く残っている因習、慣行、日常生活の中の矛盾や不合理を見直したいという強い思いで意識改革の啓発劇を誕生させてから、早や十年が過ぎた。

当初は、農家の長男の嫁達ばかりでのスタートだったが、男性が加わったことで、双方の視点で劇づくりが出来、内容も深まっていた。

家庭の話題を台本に 方言丸出しで本音ぶつける

メンバーが持ち寄る家庭の話題をそのまま台本

とし、笑いの中で方言丸出しに本音を投げかけ、観客の皆さんに考えてもらうのが大きな特徴の一つである。実はここが一番苦労するところで、一番時間を要するところでもある。メンバーの積極的な意見を取り入れ、出来上がるまでには数カ月かかることも一度や二度ではなかった。

劇で大事な大道具、小道具、衣装に至るまで、全て手作りというのも特徴だろう。特に効果を上げているのが背景音楽（BGM）で、曲選びや効果音は毎回メンバーの連れ合いが協力してくれありがたい。また、個々の特技を引き出し、楽しみながらつくり上げている。

「ほりだし」の名称も、わが大津町特産のからいも「ほりだし君」からと、「人や地域の良さをほりだす」という意味から名づけた。

旗上げ公演まで時間はかからなかった。近くの小学校の体育館を借りて、自分達の手で作ったチラシを自分達で配って回り、音響・照明など舞台のみならず会場の雰囲気づくりにも力が入った。気になるお客様からのアンケートからは「まる

でわが家を見ているようだった」「夫と一緒にみたかった」「またみたい」等々、多くの反響が寄せられた。年輩方からも「自分達の時代と比べると、今は随分暮らし良くなったと思っていたが、劇を見てまだまだ考えさせられた。頑張ってください」との反応に、確かな手応えを覚えた。

町や県からの公演依頼も増える

その後は、県や町行政からの依頼が多く、公演場所も自分達の地域と離れた所がほとんどだった。嬉しいことに、最近では近くの公民館で公演するまでになり、地域の人と膝をつき合わせてや



風邪引かぬよう優しさも



脚本作成会議

れる喜びに、「続けてきて良かったなあ」とつくづく思う今日この頃である。

依頼される団体の趣旨を汲んだ上で、男女共生の内容を盛り込み、お客様が溶け込みやすいように、それぞれの地区に残っている風習や名称などを取り入れることも忘れない。

多数ある演目の一部を紹介しよう。

○行って見たいな他所の国：一度くらい外国旅行をしてみたいという意見が出るが、様々な家庭の事情でまとまらない

○ぎゃんときゃ どぎゃんすつと（こんな時はどうするの）：家族の認知症に悩まされる妻の言葉にまったく耳を貸そうとしなかった夫が、ある夜その現場をみて驚く。



出演者記念撮影

○どんこんむねこん（どうしても納得がいけない）
○甘がき 洪かき あおしがき：甘柿は美味しいが、洪柿はどうにもならない。しかし、手を加えれば美味しいあおし柿になる。（あおし柿とは、洪柿をアルコール等で加工し美味しくした柿）人も差別せず、対応次第で優しい人になれる。

○最近、地区の老人会で公演した劇『その気になれば』のあらすじ：もの忘れがひどく、出不精になった『肥後もつこす』（熊本弁で頑固もの・偏屈もの）の時次郎と、その妻マツが生活している。

そこへ自治会長や幼馴染みが訪ねてきたことで、マツが日頃愚痴ばかり言っている自分に気が

付き、思い切って時次郎への接し方を変えてみる。ひいては時次郎も地区の「ふれあいサロン」に参加、元氣を取り戻す…。

シリアスなテーマにもかかわらず、会場には終始笑い声が起り、明るい雰囲気包まれた笑いの中に「人は気付いた分だけ変わるんですよ」とやさしく訴えることができた。

脚本や演技を通じ相手を思い遣ることを学ぶ

劇団の誕生から十年を迎えるころ、久々に初心にかえり、メンバーで意見交換の時間を持った。この頃には、少しずつではあるが、地域でもよんだ水が流れていることを皆が実感していた。にもかかわらず、全員が家庭への感謝を口にしたことはもちろんだが、一人ひとりが自分自身の反省を挙げたことに驚いた。

脚本を作ったり演じたりしているうちに、相手を思い遣ることを忘れず、先ず、自分自身が変わらなければ家庭も地域も変わらない、ということに気付かされたことは、大きな成果といえよう。何度も何度も寄っては話し合い議論を戦わせてつくり上げていたその過程こそが、私達の勉強につながっていたのである。

しかし、全体を見たとき、地域の風習はそう簡単に変わるものではない。多くの課題が残っているのも事実である。これから家庭の協力はもちろん、地域の影の力があってこそ、ここまで継続できたことを肝に銘じて「男女共生の住みよい地域づくり」に貢献していきたい。

「B級ご当地グルメの祭典！」の効果絶大 〜Bー1グランプリin姫路を振り返って〜



Bー1グランプリin姫路実行委員会事務局 係長

● 大山嘉文

Bー1グランプリとは？

Bー1グランプリは単なるグルメイベントではない。食を通じてまちを売るという意思をもった「まちおこしイベントである」と、B級ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会（通称・愛Bリーグ）はいう。

また、安くて、旨くて、その地域に愛されているご当地グルメを「B級ご当地グルメ」と呼び、地域それぞれが持つ魅力を「ご当地グルメ」という素材を使ってPRする方法をとっている。

その「ご当地グルメ」により、まちおこしに取り組む団体（愛Bリーグ）が工夫を凝らしたおもてなしやわがまちのPRなど、お披露目する場がBー1グランプリである。

毎回膨張する来場者数

このイベントは、平成十八年に青森県八戸市で始まり、出展数はわず

か十団体、来場者も一万七千人だったが、翌年の富士宮大会では来場者が二十五万人に膨れ上がり、前回の厚木大会で四十六団体、来場者四十三万五千人、今回の姫路大会では過去最多の六十三団体、来場者も五十一万五千人の大イベントとなった。

なぜ短期間でここまで大きなイベントになったのか。その理由として、愛Bリーグが理念として掲げる「地域を元氣する！」という目標に基づいた「まちおこし」の成果が上がっていることが考えられる。

またそれだけではなく、料理に添えている箸を投票することによってグランプリを決定するなど注目を浴びるような仕掛けもある。

そのほか、料理の購入方法として、現金ではなくチケット制を採用している。一日あたり一万食を提供する団体もある。一分あたり二十七食を提供するためには、お釣りを渡している時間も惜しい。たくさんの方の来場

者に対し早く提供する方法として、チケット制が考えられたのである。回を重ねることにより工夫とカイゼンが盛り込まれたイベントがBー1グランプリなのである。

姫路大会開催の舞台裏と成果

Bー1グランプリは愛Bリーグと開催地の実行委員会が主催する。

姫路市では、運営主体となる実行委員会を十三カ月前に設立し、同一年度に二回、Bー1グランプリを開催することとなる。愛Bリーグは地域別に六つの支部がある。そのうち近畿・中国・四国支部初の大会を急遽姫路で開催することとなった。

その支部大会を開催したことにより、いくつかの課題が浮き彫りとなった。チケット制のPR強化、チケット販売方法の改善、交通渋滞の解消、臨時駐車場の更なる確保などである。

まずは、チケット制のPRと前売

り強化に取り組む。あらゆる機会にPRするとともに、前売り協力施設を百五十七カ所に、またBー1グランプリ初の通信販売をすることで総数の四五%も販売できたのである。

三千八百人のスタッフ体制

運営スタッフとしては、二千人のボランティアを目標としていたところ、市内の中学・高校、企業や団体等から二千七百二十一人、市職員等を合わせ総勢約三千八百人のスタッフ体制を築くことができた。非常にありがたいことである。

交通対策としては、公共交通機関での来場をPRする一方、臨時駐車場として十四カ所、六百五十台分を確保することができ、会場付近までを結ぶシャトルバスで来場してもらうこととしたのである。

以上の事例は一部だが、前日までコツコツと課題を解決する日々であった。

開催前の週末は四週連続雨天であったが、当日は摂氏二〇度を超える好天となった。人気ブースに並ぶため徹夜組も出るほどで、提供開始時にこれ以上並ぶことのできない行列制限ブースが十六団体となる。

会場は熱気のご当地グルメの匂いに包まれた。来場者向けのサービ

表 開催状況

	第1回 青森県八戸市	第2回 静岡県富士宮市	第3回 福岡県久留米市	第4回 秋田県横手市	第5回 神奈川県厚木市	第6回 兵庫県姫路市
日時	平成18年 2月18日～19日	平成19年 6月2日～3日	平成20年 11月1日～2日	平成21年 9月19日～20日	平成22年 9月18日～19日	平成23年 11月12日～13日
出展団体数	10団体	21団体	24団体	26団体	46団体	63団体
集客人数	1万7千人	25万人	20万3千人	26万7千人	43万5千人	51万5千人
ゴールドグランプリ	富士宮やきそば 学会	富士宮やきそば 学会	厚木シロコロ・ ホルモン探検隊	横手やきそば 暖簾会	煮でを つる縁の 甲府さん みなりも なとり	ひるぜん焼きそば 好いどん会

第7回は北九州市で開催 10月20日～21日



B1-会場の様子



商店街の様子

として、ブースの待ち時間等を三分ごとにツイッターやメール送信、ホームページ掲載するなど情報提供の充実に努める。

両日とも完売したブースが続出するほど多くの来場者で賑わい、イベントは大成したのである。懸念していたチ

ケットは飛ぶように売れたため、初日終了後に前売り店舗の売れ残りチケットを回収して翌日分を確保したほどである。

商店街は普段の十倍の人出に

また、チケット販売所の増設と販売窓口を増加させたことにより、販売もスムーズであった。

姫路駅から会場へ至る主要通りは非常に賑わい、特に商店街では「普段の十倍の人が歩いていった。売り上げが三割増となった店舗もあり大きな効果があった」との感想もあり、このイベントのもたらす効果に驚愕しているようであった。特に、チケットを商店街等でも共通利用できるとしたことにより、来場者には利

便性の向上、店舗には相乗効果が図られる結果となった。

周辺の道路については、事前のPRや、主要交差点でのスタッフによる臨時駐車場への誘導などの対策が功を奏し、終日目立った渋滞もなかった。支部大会を開催したことによる経験、そこで得た課題を一つ一つ着実に解決してきた結果、成功に結びついたに違いない。

開催自治体に及ぼす影響

姫路のシンボルである世界文化遺産・姫路城は一昨年から大天守保存修理中で、本市を訪れる観光客は減少している。このような全国的イベントを開催することは、そのまちを知ってもらう絶好の機会である。

特に、B-1グランプリはマスコミの注目度が非常に高く、開催地・姫路を全国各地で発信してもらったという機会となる。過去の開催地である横手市では十三億円、前回開催地の厚木市では三十六億円と期間中の経済波及効果を公表している。姫路市で

も、前回を凌ぐ効果があるに違いない。

姫路市の人口に迫る 五十一万人を集客

来場者アンケートによると、市内よりも市外の来場者が多く、その地域も全国にわたっている。市内での宿泊についても、ホテル・旅館のほか、帰省や友人宅への宿泊も含めて約二万人、B-1を目的に初めて姫路にきた方が約五万七千人と想定される。満足度についても七割以上が「大変満足」「満足」と回答しており、三千人のスタッフによるおもてなしの成果があったと思われる。

姫路市の今年度主要事業の一つに掲げ、市挙げた取り組みとして開催したB-1グランプリ。姫路市の人口に迫る五十一万五千人の集客、当日のマスコミ取材が百六十件、終了後も続く取材など、B-1グランプリ開催地・姫路、食のまち・姫路を全国に発信することができたのではないだろうか。

そして、たくさんの人を迎えるために協力いただいたボランティアの皆様さんとネットワークができたこと、姫路城周辺にこれだけの来場者を迎え、無事運営できた実績は今後、姫路市の観光施策に活かしていけるものと確信している。

まちにストーリーを！

「地域資源とは、遠くではなく近くににあるもの」



いよこコロザシ大学学長 ● 泉谷昇

(財)地域活性化センターでは、地域再生の担い手となる人材の育成を目的としたワークショップ「地域再生実践塾」を実施している。
本号では、今年度第五回となる愛媛県松山市での開催内容について、主任講師をお願いした泉谷昇いよこコロザシ大学学長にご報告いただいた。(地域支援課)

フィルム・コミッションとして

人口五十一万人の松山市は、一六〇三年に加藤嘉明が築城した「松山城」にちなみ名付けられ、司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」を題材としたまちづくりを進め、それは、主人公の俳人正岡子規、帝国陸軍・海軍で活躍した秋山兄弟が抱いた高い志、努力、夢や希望を基本理念にしている。

その松山で「地域資源を活かした観光まちづくり」と題した「地域再生実践塾」は、初日から大いに盛り上がった。

私は九年間、観光行政とNPO活動の二足のわらじを履き、「フィルム・コミッション」として、松山・愛媛の魅力を発掘し、映画やテレビなどで発信してきた。「世界の中心で、愛をさけぶ」「書道ガールズ」「坂の上の雲」など、三百本以上の撮影支援を行い、その経験が「誰でも先生、誰でも生徒、どこでもキャンパス」と掲げた「いよこコロザシ大学」に発展した。

そんな経歴なので、「従来の実践

塾とは異なる手法になるがいいのか？」と主催者と確認した上で、主任講師を受諾した。

1日目…間違えて答えなさい

各地から集まった三十三名の受講生は互いに面識が無く、緊張感を漂わせていた。この雰囲気は早くほぐそうと、開始早々のアイスブレイクは「間違えて答えなさい」。

松山・愛媛に実在する食べ物の名称を考え、隣同士で答え合わせを促した。「知らない者同士」の答え合わせに正解が出るはずもなく、珍回答が続出した会場は和やかな雰囲気で包まれた。

自分の持ち時間を削ってまでした理由は「食べ物には地域を知る最初の一步」だからだ。松山の魅力と言え

下記名称を自己紹介シートにご記入下さい。書き終え次第答合わせを兼ねて自己紹介をお願いします。



エントリーNo. 1



エントリーNo. 2



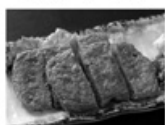
エントリーNo. 3



エントリーNo. 4



エントリーNo. 5



エントリーNo. 6

アイスブレイクは「間違えて答えなさい」

ば約三十万人が訪れる「松山城」。約八十万人が訪れる「道後温泉本館」が有名だが、歴史や偉業だけでなく、「食べ物」も地域資源ということを知ってもらうためにおこなった。

私からの提言は、「地域資源には目に見える有形物(建造物、景勝地、産業、特産品など」と、目に見えない無形物(味、方言、昔話、風習、現象、伝統など)があり、遠くではなく、近くにある」とし、「日常に溢れている」と紹介した。ただ、このまま受け止めると、消化しにくいので、そこに「物語性(ストーリー)」があるか否かが大切と付け加えた。

この時点で受講生の中には、腑に落ちた人もいれば、落ちなかった人もいたはずだ。しかし、その後の特別講師(松山市観光産業振興課中島敏喜氏、坊っちゃん劇場支配人山川龍巳氏、NPO法人シクロソーリズムしまなみ代表理事 吉武優子氏)の講話は、それぞれ異なった切り口だったが、「身近な物語性」という「共通点」があり、共感が多かったはずだ。

中島氏は「俳句」という松山では小学生も詠む文化を、山川氏は、愛媛に縁ある題材を舞台に、吉武氏は「しまなみ海道」という日用道路を自転車愛好家の聖地にした。



ノラ猫の視点で松山市をFW

それぞれが新しい資源を調達したのではなく、「愛媛にあった資源」に着目し、深く掘り下げた末に見つけた魅力を活かしていた。この「資源を深く掘る」のが魅力発掘のポイントなのだ。

2日目…なりきり探索

まちづくり松山代表取締役社長の日野二郎氏による「大道商店街の観光誘客取り組み」から始まり、道後温泉誘客のまちづくり推進協議会会長の宮崎光彦氏からは「道後温泉地域の観光誘客取り組み」を紹介いただき、その後はフィールドワーク（以下…FW）に移った。

FWでは「松山の通信簿」と題し、「シニア、こども、若者観光客、動物」

の四グループに「なりきっていただき」「松山の「素敵な所」「残念な所」を写真に撮りながら約五キロのコースを歩いたり、路面電車に乗りながら探索した。

「なりきり」の目的は、視点の変化による既成概念の柔軟化である。

五十万人が暮らす松山には年間五百万人以上の観光客が訪れる。暮らす者、来訪者の交流に「互いを知る」ことは大切であり、今回のFWでは「それぞれの立場で当事者となる」ことを目的とし、六十歳なのに「二十六歳」「三十二歳なのに「六歳」、人間なのに「ノラ猫」になりきり、普段とは異なる視点で、松山を採点していただいた。

3日目…我々が取り組むことは…

FWの採点結果はどのグループも気づきを促す内容だった。

シニアは「足湯があるので旅の疲れも癒される」と思いきや、「段差が大きい、階段の手すりが無い」と指摘した。若者観光客は「雲形のナンバープレートに感激」と思いきや「違法駐輪で景観が台無し」と指摘した。

こども達は「こどもおみくじ、坊っちゃん列車が素敵」と感じる一方で、

「ゴミや下品な看板が街中に多い」と指摘した。動物は「細道、路地が多く安心できる」と思いきや「車などの通行量が多く、危なくて渡れない」などの指摘が挙った。

これらの指摘は、実はこの地域にも該当する。この問題の本質は、現状に慣れてしまい、問題を問題と思わない無関心になっていることである。今回は、強制的に「視点」を変えていただき、「自分ごと化」して松山を採点していただいた。

もう、お分かりだろう。地域を活性化させる者が、取り組まなければならないのは、「違法駐輪撤去」「放棄ゴミ問題」よりも先に「無関心への興味喚起」である。地域の活性は「どこかの誰かが」ではなく「私達が」主人公であり、「あそこが」ではな



「自分ごと化」して松山を採点

く「ここ」が舞台である。無関心に立ち向かうことで、「気づき」が生まれ、地域に愛着などの物語性（ストーリー）が生まれるのだ。

今回の実践塾では、参加者が地元に戻っても参考になる知識と技術を実践できたと思う。各地から気づきや効果があった！という報告が一つでもあがれば嬉しい。

今回は初めての試みを多くした実践塾でもあった。私の要望に快く対応くださった事務局、そして、参加者の皆様、三日間、本当にありがとうございました。

実は最も多くを学んだのは「私」だったのではないかと執筆しながら、振り返っている。また、どこかで会いましょう！



今回参加されたみなさん

地域全体が来訪者を迎える農村ギャラリー

～沢地域の廃校を住民サロンに活用した実証実験報告～



沢小ワークショップ代表

● 伊藤敏行

財団法人地域活性化センターは、「合併市町村住民組織活性化支援事業」として、合併後に主たる事務所が置かれていない旧市町村の地域を活性化することを目的に、住民組織等が自主的・主体的に実施する事業を支援している。今回、平成二十二年度に同事業を活用した、沢小ワークショップの取り組みを、ご紹介いただいた。

(企画・コンサルタント業務課)

沢地域は、千葉県の北東部に位置する香取市（佐原市、小見川町、山田町、栗源町が合併）の南西部、自然豊かな旧栗源エリアに位置し、車では東京都心や千葉県内の主要都市から高速道路で約一時間、成田空港から一般道で約二十分の所要時間となっている。

この辺りを源流とする栗山川は、利根川から取水した農業用水を下流の九十九里地域へ運ぶ重要な河川である。日本一の焼きいも広場で有名な栗源のふるさといも祭は、さつまいもの女王と称される特産のベニコ

マチを百五十カ所のモミガラ山の五トン焼き、来場者に無料で配布するユニークなもので、人口五千人の地域で六万人の集客を誇る。

美しい源流と水郷のふるさと 交流空間づくりプランの目的

香取市において、北部の水郷地域には、佐原地域の小野川を中心とした歴史的町並みや香取神宮等の歴史的資源、小見川地域の黒部川を中心とした水上スポーツレクリエーション資源等の観光受け入れ体制が構築されているものの、南部地域は農村であり従来型の観光資源は少なく、

交流人口の受け入れ実績において格差がある。

これまで南部の農村地域においては、道の駅くりもと（紅小町の郷）やクラインガルテン栗源を中心とした農業体験、浦安市との体験交流等に取り組んでおり、「体験型」に大きく変容してきている観光ニーズに先駆けた取り組みを展開してきた。

しかし、近年、離農者や都市部への人口流出により里山が放置され荒廃し、美しいふるさとの風景が失われつつあるとともに、人口減少傾向、小中学校の統廃合、公共交通の廃止統合な

どにより、地域の賑わいの場が失われつつある。

これらを踏まえ、市では平成二十年度に「美しい源流と水郷のふるさと交流空間づくりプラン」を策定。地域の多様な主体の参画により、ふるさとの貴重な財産である風土・自然環境、伝統的な行事や風物、文化的環境等の地域資源を活かし、交流人口の増加と滞在時間の拡充を実現するための戦略プランをスタートさせた。

学校統合を経て 地域ワークショップへ

二十一年三月、栗源地域で三つの小学校が一枚に統合され、児童数五十人の沢小が閉校となった。沢小では翌年度の入学児童数がゼロという状況であった。統合にあたって

■合併市町村住民組織活性化支援事業の概要

【事業概要】

地域自治組織、コミュニティ、NPO、自治会等が自主的・主体的に実施するソフト事業を支援し、合併後に主たる事務所が置かれていない旧市町村の地域を活性化することを目的とする。

【助成対象団体】

平成11年度以降に合併した市町村及び平成23年度に合併予定の市町村

【助成金額・助成率】

助成金額は、200万円が上限（平成22年度までは、300万円が上限）
助成率は、助成対象経費の100%以内

【交付団体】

平成22年度 35団体
平成23年度 26団体

【問い合わせ】

企画・コンサルタント業務課
電話番号 03-5202-6133



4回目のワークショップで地域資源マップが完成



里山冒険ツアーの途中、名水「中白清水」へ向かう

おんぼ焼き、薪割り、竹細工、清水汲み、味噌づくり等の生活・文化・自然体験プログラムを実施し、人材発掘と受入側の住民の意識高揚を図った。

宿泊実験では、松戸市のNPO法人「子どもの環境を守る会」と連携しモニターツアーを実施。沢小で一泊二日、二泊三日の合宿を行い、もらい湯やホタル観察、カブト虫捕り等宿泊時ならではのプログラムを実施した。

今後は、沢小の有効活用の実現に向けて事業主体を市が検討する方向。地域の人材・インストラクターを束ねるNPO等がその主体と連携して、体験プログラム事業の役割を担い、人と人との交流により「絆」が生まれ、持続可能な地域づくりに発展していくことを期待する。

は、三校のPTA、地域住民等多くの人々が、スクールバスの運行や施設整備、閉校式、記念誌の発行などに関わり、マンパワーを費やした。私は当時、存続する側の学校の教員であり、閉校と同時に地域の活力が失われていくのではないかという不安を抱いた。

教育委員会によるアンケート結果では、沢小を、道の駅くりもとや名水「中白清水」との近接性を活かした宿泊型体験施設としての活用を望む声が多かった。これを受けて市では、前述した戦略プランのモデル地域として位置づけ、市民協働のスタンスで二十一年度に「沢小ワーク

ショップ」を組織。定年退職し、少年自然の家などで自然体験・水上スポーツ体験インストラクターをしている私は、当地域に縁が深かったこともありファシリテーターとして参加させていただくこととなった。

農村ギャラリー拠点づくり

二十二年度に、地域活性化センターの支援事業を活用することにより、地元の活動団体や体験インストラクターを中心に声をかけをし、ワークショップを全七回開催。

約三百五十世帯、約千人が住む沢地域（沢・開進・倉沢・宿原集落）全体の地域資源や暮らしぶりを「農

村ギャラリー」と見立て、観光資源として捉え、その拠点に沢小を位置づけた。新潟県上越市の「自由の学び舎やすづか学園」や「月影の郷」など地域住民等が学校跡地を運営する事例を研究したほか、後述する体験プログラムの実証実験の成果を基に、都市部住民と交流する体験プログラムのメニューを整理し、カード化するとともに、地域資源を地図に盛り込んだ「沢地域歩きマップ」を作成し、道の駅くりもとで配布した。

体験プログラムの実証実験では、

地域団体や受入農家がインストラクターになり、里山の草刈り指導のほか道の駅から名水までの案内看板整備、栗源流焼きいも、落花生

拠点整備の検討では、沢小の事業性調査（事業構造編）を専門業者に委託。宿泊機能のほか、校舎内に地域住民のサロン（人々の拠り所、楽しめる場）としての空間づくりをコンセプトに据えた。この調査結果を踏まえ、市から追加補助金を受けて管理・運営計画の検討を行い、インシヤルコストの算定、経営収支の試算等を経てモデルプランを作成し、市に報告した。

事業の成果と今後の方向

これらの成果は「廃校活用宿泊施設」活用事業として、市が二十二年度に策定した「観光・交流・集客アクションプラン」の先導的事业に位置づけられ、二十三年度には草木染め体験、乗馬体験などの観光モニターツアーを実施し好評を得た。二十三年十二月には、香取市まちづくり条例による沢地区住民自治協議会が立ち上がった。

琴引浜の鳴き砂を次世代に守り伝える

～住民主体による琴引浜の景観保全を目指して～

京丹後市は、平成十六年四月一日に峰山町、大宮町、網野町、丹後町、弥栄町及び久美浜町の六町が合併して誕生した市である。同市は、京都府北部、丹後半島に位置し、沿岸部は山陰海岸国立公園、丹後天橋立大江山国立公園に指定され、内陸部には標高四百メートルから六百メートルの山々が連なる、自然豊かな地域である。

京丹後市網野町には、日本最大級の鳴き砂の浜として知られている琴引浜がある。琴引浜は、千八百メートル

も及ぶ海岸線を有し、コンクリート護岸などの人工的構造物が一切ない美しい自然海岸である。また、琴引浜は、平成八年に環境省選定の「残したい日本の音風景百選」と日本の渚百選中央委員会選定の「日本の渚百選」に選ばれており、風光明媚な景勝地としても知られている。

今回は、地域の貴重な財産である琴引浜の鳴き砂の保護活動に取り組んでいる「琴引浜の鳴り砂を守る会」を訪ね、松尾会長、三浦氏取材した。

鳴き砂の保護活動に取り組むきっかけ

昭和五十一年に同志社大学教授の三輪茂雄氏（故人）から網野町長あてに鳴き砂の希少性、重要性を記した「琴引浜遊歩道計画に関する要請文」が提出された。こうした動きを受けて、網野町では昭和五十三年に琴引浜を、昭和五十七年に鳴き砂（鳴

き砂の主成分は石英であり、その摩擦と振動により「クックッ」という音を発する）を文化財に指定した。

ところが、昭和六十一年に琴引浜の後背地に民間のリゾート計画の話が持ち上がり、この計画に危機感を抱いた地元住民が中心となり、自分たちの貴重な地域資源である鳴き砂を守るために「琴引浜の鳴り砂を守る会（以下「鳴り砂を守る会」という。）を立ち上げ、住民主体による鳴き砂の保護活動に取り組むことになった。

鳴き砂の保護活動の取り組み

鳴り砂を守る会は、現在約二百四十名の会員で活動しており、その半数が網野町内の住民で、さらにその半数が琴引浜の地元である掛津地区と遊地区の住民で構成されている。特に、掛津地区では、約六十世帯のほぼすべてが会員と



琴引浜

なっており、自治区の住民と鳴り砂を守る会の会員が同一となっており。この両組織が連携しながら、鳴き砂の保護活動を行っているところに特徴がある。

鳴り砂を守る会設立当初の活動は、浜辺の清掃と啓発が中心であったが、現在は海水浴シーズンの海岸パトロール、イベントを通じた環境保護の啓発、琴引浜鳴き砂文化館の展示作成及び運営管理などが中心となっている。

① 海水浴シーズンの海岸パトロール
平成十三年三月に鳴き砂の保護を目的に制定された「網野町美しいふるさとづくり条例（現在は京丹後市美しいふるさとづくり条例）に基づ

★ 団体プロフィール ★

設立年＝昭和62年6月
設立・運営主体＝自主的組織
（コミュニティ組織）
代表者＝松尾 庸介
会員数＝240名
〈連絡先〉
〒629-3112
京都府京丹後市網野町掛津56
TEL (0772) 72-5511



はだしのコンサートの様子



琴引浜の鳴り砂を守る会の松尾会長（左）、三浦氏（右）

王のピラミッドから出土した鳴き砂など、世界中の鳴き砂や琴引浜への漂着物等の展示があるほか、鳴き砂を鳴かす体験コーナーや

琴引浜に生息する微小貝、有孔虫などが顕微鏡で観察できるコーナーも設けられている。オープン以来、この施設には多くの人が訪れ、年間来場者数は一万四千人から一万五千人にものぼり、今では地域の観光名所のひとつとなっている。

景観を活かしたまちづくりを目指して

琴引浜は、平成十九年に国の天然記念物及び名勝に指定された。平成二十二年には、鳥取市から京丹後市までの総延長約百キロメートルの海岸線が「山陰海岸ジオパーク」として、日本で四番目に世界ジオパークネットワークへの加盟認定を受けた。

こうした中、鳴り砂を守る会では、ガイド養成に力を入れている。民宿のおかみさんなどに鳴き砂のガイド役を担ってもらい、多くの観光客を呼び込む考えだ。また、観光客や地元小中学生向けに琴引浜鳴き砂文化館を活用した環境学習の体験メニューを考案しようとしている。

最後に、松尾会長は「琴引浜を守ることが地域づくりにつながっている」と熱く語った。今後も、鳴き砂が奏でる音の素晴らしさを次世代に守り伝える鳴り砂を守る会の活動に注目していきたい。

編集委員

● 山口正晴

き、鳴り砂を守る会は環境保護団体に認定されている。これにより、同会は琴引浜の喫煙禁止等の管理活動に主体的に取り組むことができていく。同会では、平成十五年から海水浴シーズンの海岸パトロールを開始し、海水浴客に禁煙、花火禁止等の指導や啓発を行っている。これまで継続して海岸パトロールに取り組んできた結果、鳴き砂の保護対策は大きく向上し、鳴き砂の鳴き具合にもいい影響を与えている。

② イベントを通じた環境保護の啓発

鳴り砂を守る会では、自治区や地域内の団体と協力し、「はだしのコンサート」を毎年一回開催している。

このイベントはこれまで一八回開催されている。このイベントでは、キャッチフレーズを「あなたが拾ったゴミが入場券」とすることで、多くの人に鳴き砂を知ってもらうとともに、ごみを拾う活動にも参加してもらう内容となっている。平成二十三年六月に開催された「はだしのコンサート」では、浜のゴミ拾いやビーチマラソン、アーティストによるコンサートなどが行われたほか、フリーマーケット（二二ブース）や飲食店（一三ブース）などの出店もあり、地域をあげたイベントとして定着している。

また、鳴り砂を守る会では、自治区が毎年開催している「琴引浜保全ツアー」にも積極的に協力している。このツアーはこれまで六回開催されている。平成二十三年十月に実施したツアーには、東北の陸前高田に松苗を届けるという趣旨のもと、五十名の地元小学生や家族連れが集まり、琴引浜の後背地の松林の中で、松の実生苗をポットに移す作業などを行った。

こうしたイベントを通じて鳴り砂を守る会では、持続可能な琴引浜の環境保護に関する啓発活動にも積極的に取り組んでいる。

③ 琴引浜鳴き砂文化館の展示作成及び運営管理

平成十四年十月にオープンした琴引浜鳴き砂文化館は、鳴き砂をテーマとした体験学習施設である。この施設は、鳴き砂保護の拠点として、建物本体を財団法人日本ナショナルトラストが建設し、内部の展示や周辺整備を町が実施した。

館内には、中国、エジプトのクフ

スポーツ拠点づくり推進事業

(佐賀県佐賀市)

「夢はウィンブルドンへ」を合言葉に

「グラスホパー全国ジュニアテニスin佐賀」と地域活性化

佐賀市教育委員会社会教育部スポーツ振興課

田中泰司

地域活性化センターでは、スポーツ拠点づくり推進事業として、市区町村とスポーツ団体が連携・協力して全国各地に青少年があこがれ、目標とするスポーツごとの拠点をすることでスポーツの振興と地域の再生を推進する取り組みを支援している。

今回は、佐賀市の取り組みをご紹介します。

(地域支援課)

佐賀市は、佐賀県の県庁所在地で、県の政治・経済・教育文化などの中心として発展してきた。平成十七年十月一日には一市三町一村(佐賀市、諸富町、大和町、富士町、三瀬村)が合併、平成十九年十月一日には一市三町(佐賀市、川副町、東与賀町、久保田町)が合併して、現在、人口約二十三万五千人の「佐賀市」となった。

県の中心部に位置する市は、合併により南北に長い地域となり、都市として発展する一方、脊振・天山山系の山並みや平坦で豊かな佐賀平野を有し、有明海にも接している。

九州では珍しいスキー場や山あいの温泉、ゴルフ場などの自然を堪能できるレジャースポットもある一方、市街地には、かつて佐賀藩三十六万石の城下町として栄えた面影を今に伝える通りや建物が数多く残っている。

三月には「佐賀城下ひなまつり」、十一月には世界中から百機を超える熱気球が集まる「佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」を開催し、一年を通して多くの観光客が訪れにぎわっている。

小学5～6年生対象に世界に通じる選手育成



開会式



天然芝コートでプレイする選手

このような佐賀市で開催される「グラスホパー全国ジュニアテニスin佐賀」は、小学校五年生、六年生のジュニアを対象とし、テニス競技力の向上はもとより、トップアスリートとして必要な知識、徳育、食育などの講座を開催し人間力の資質を高め、世界に通じるテニス選手の育成にとどまらず、健全な心と体を育むことを目的としており、テニスプレイヤー憧れの「ウィンブルドン」へ向けて、全選手が一週間佐賀市に滞在する「滞在型の大会」運営が特徴となっている。

今年の第七回大会も、「夢はウィンブルドンへ」をスローガンに、全国を九ブロックに分けた各ブロック

から選抜された百二十八名の選手が出場した。

まず、期間中、選手達は、試合の中で互いの技術を高めあうだけでなく、日本でもトップレベルのコーチ陣に指導していただく機会を得る。

会場は全国でも随一の天然芝コート十六面を有しており、小学生のうちから天然芝コートでプレイできることも特徴の一つとなっている。今大会の期間前半は天然芝コートでの試合ができたが、期間後半は悪天候の日が続いたため、インドアコートを使用していた試合消化となり、本線とは別に敗者で組まれる練習試合数が縮減されることとなったものの、海外遠征時と同様に、試合の日程変



ウィンブルドン出場を夢見る選手たち



佐賀の伝統工芸体験

この大会から育った トップアスリートも

更に伴うスケジュール管理も選手自身に行わせるなど、選手にとっては多くのことを学ぶ機会につながった。

これら試合やトレーニング風景には、毎年多くの観客があるが、今年も悪天候にもかかわらず、延べ約二百名の観客があった。

さらに、夜の講座においては、テニスの歴史やルールやマナー、スポーツ栄養学や成長期のトレーニング方法を学習し、食生活の大切さや、生活習慣面などを専門の指導者のものと、一週間を通じて身につけられる

スケジュールが組まれている。中には、通常なかなか学ぶ機会のない長期遠征時の自己管理の重要性など、トップアスリートとして活躍した講師陣であるからこそその話も盛り込まれ、まさに国際的なプレイヤーを育てるための場となっている。

二〇一一年、全豪オープンテニスジュニア大会ダブルスで準優勝を果たした加藤未唯選手も、この大会から巣立っていった選手の一人である（第一回グラスホバー参加）。

運営面では、一週間を通して、地元ボランティアスタッフ十五名、ボランティア大学生二十名など、延べ百七十四名のボランティアスタッフ

による栄養指導及び昼食、夕食時の食事指導、洗濯指導等をサポートいただいております。大会期間中は、選手、コーチや関係者、延べ九百十一名が市内に滞在し、宿泊や飲食などに伴う経済効果がもたらされている。

大会では、佐賀市も積極的に関わり、大会プログラムの一つとして、参加全選手が「有田焼絵付け」や「佐賀錦小物づくり」など、佐賀の歴史文化にも触れてもらうように企画している。また、期間中四講座開催している夜の講座の一部を、「公開講座」として市民にも参加してもらい、選手とともに講師の方の話を聞く機会を設け、講座はもちろん、テニスや大会への関心を深めてもらっている。

一方で本大会の関心やスポーツ推進を図るため、大会会場にて「こどもテニス教室」を開催しているが、毎回定員を満了す参加者数となっている。

大会の様子は、地元の新聞、テレビ等でも大きく取り上げられており、七回目の開催を迎えた今年は、本大会に対する認知度が向上し、ほとんどの県の選手に参加していただくことができ、選手はもちろん、コーチ、保護者にも広く本市のPRを行うことができたと思っている。

日本テニス界でも高い評価

本大会は、「スポーツ拠点づくり推進事業」の承認大会として平成十七年度から開催しているが、本大会の趣旨である選手の育成を目指した大会運営・プログラムは、日本テニス界においても大変高い評価をいただいていると伺っている。

今後主催者、中央競技団体、ボランティア団体及び行政が連携し、本大会を継続していくことにより、近い将来、参加選手の中から、すべてのテニスプレイヤーが夢見るテニスの聖地「ウィンブルドン選手権」に出場する選手が生まれるとともに、日本中のジュニア選手たちが佐賀市で開催されるこの大会に出場することを目標にするようになることを願っている。

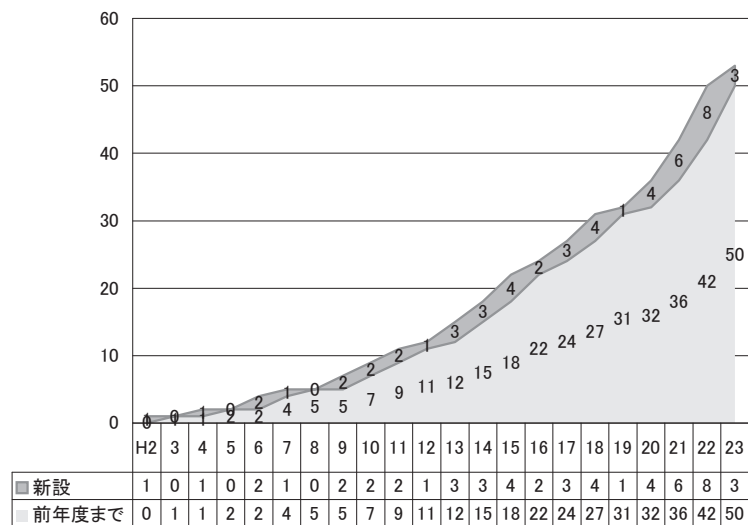
また現状では、英国ウィンブルドン選手権を主催するクラブ会長も称賛する全国随一の天然芝コートを有する「グラスコート佐賀テニスクラブ」という全国に例を見ない施設が市内にあることが、まだ十分に知られていないといえない。この大会を通して、このオンリーワンの施設をもっと全国的にPRできればと考えている。

都内アンテナショップ53店舗に 年間売上1億円以上6.4%増¹

地域活性化センターでは、都道府県を通じ、東京都内「自治体アンテナショップ実態調査」（平成二十三年十月一日時点）を取りまとめた。

地域の総合情報を受発信するとともに、特産品販売や飲食施設等を設置する自治体アンテナショップは、

図1 自治体アンテナショップ設立推移（単位：店）



厳しい財政状況の中でありながら、年々増加傾向にあり、平成二十三年度は前年度より四店増加して、五十三店（都道府県三十七店、市町村十六店）と過去最高になった。（図1参照）前回の調査以降の出店報告は、茨城県「黄門マルシェーいばらき農園」（中央区銀座）、茨城県下妻市「シモンちゃんの家」（足立区北千住）、山梨県「Y | wine」（中央区日本橋）、兵庫県豊岡市「コウノトリの恵み豊岡」（千代田区有楽町）、複数市町村で運営される「とれたて村」（板橋区大山）の五店。平成六年から営業を続けてきた福島県いわき市「いわき・ら・ら」は3月で閉店となった。

1億円以上の売上店舗
全体の約五割に

自治体アンテナショップ

の事業内容は、物産販売（五十二店）、観光案内（四十一店）、イベント開催（三十二店）、飲食施設運営（二十三店）の順に多く、物産販売は一店を除く店舗で行われている。

「設立の目標」についての調査では、「自治体のPR」「特産品のPR」「特産品の販路拡大」「地域情報発信」が多くあげられた。

また、各店舗の年間売上では「一億円以上三億円未満」が二八%と最も多く、一億円以上を売り上げている店舗は全体の四七・二%となり（表1参照）、昨年度の四〇・八%を六・四ポイント上回った。

グローバル化するアンテナショップ

店舗の運営は、多様化しており自治体が直接運営するのは一店舗のみである。「第三セクター」、財団、JAなど運営・委託（二〇店）が最も多く、次いで「民間・NPO等へ委託」（十八店）である。コンビニ、百貨店、広告代理店、NPO等への委託、大学、商店街、複数自治体間の連携など変化に富んでいる。

今回の調査以外であるが、海外への出店も増えつつあり、二十三年十二月には、東日本大震災の影響で遅れたものの、北海道・東北六県、新

表1 年間売上額別 店舗数

年間売上	H23年度		H22年度	
	店舗数	%	店舗数	%
3千万円未満	13	24.5%	7	14.3%
3千万円以上5千万円未満	4	7.5%	3	6.1%
5千万円以上1億円未満	9	17.0%	8	16.3%
1億円以上3億円未満	14	26.4%	9	18.4%
3億円以上5億円未満	5	9.4%	5	10.2%
5億円以上7億円未満	4	7.5%	6	12.2%
7億円以上10億円未満	2	3.8%		0.0%
不明	2	3.8%	11	22.4%
合計	53	100.0%	49	100.0%

潟県が共同で香港に「JAPAN SUPER」をプレオープンした。香港、上海、台北には、すでに十府県（福島県、和歌山県、京都府、沖縄県など）のアンテナショップが出店しグローバル化が進んでいる。他の自治体も、地域産品販売拡大、訪日観光客誘致の拠点として、東アジア進出に熱い視線を注いでいる。なお、詳細情報は、ホームページ「地域づくり百科」アンテナショップコーナーを参考にされたい。

地域づくり情報課 ● 畠田千鶴

1 「地域経済情報」平成23年6月号（株）鹿児島地域経済研究所発行（参照）

弥生後期の環濠集落に注目！

「神崎遺跡」が市内で初の国史跡に



綾瀬市教育委員会生涯学習課 主査

井上洋一

綾瀬市は神奈川県ほぼ中央部に位置する。市域は約六分の一を厚木基地が占め、東名高速道路と東海道新幹線が横断している。

平成二十三年二月に市内で初の国史跡として指定された「神崎遺跡」は今後の整備により、地域活性化のための新たな拠点となることが期待さ

れている。

神崎遺跡は弥生時代後期（今から約千八百年前）の環濠集落である。環濠集落とは、外敵の襲来から身を守るために、周囲に防御用の深い溝を掘った村である。

弥生時代には全国各地で環濠集落が出現した。この時代に使われるようになった鉄は、すべて輸入に頼っていた貴重品だったため、鉄の取得をめぐり、日本列島内は戦乱が多発したと考えられている。

東海地方からの人の移動裏付け

全国に数多く環濠集落が確認されているが、その中で神崎遺跡が国史跡に指定された理由は主に二つある。一つ目は、日本列島内を東海地方（現在の愛知県から静岡県にかけての地域）の集団が綾瀬市の神崎の地へと移動してきた事実を明らかに示した点である。

発掘調査の際、遠く離れた地域の土器が全体の数%の割合で出土する

ことはよくある。ただ、この場合、土器が他地域から運ばれてきたのか、あるいは他地域の集団が当地へ来て土器を作ったのか、判断に迷う。神崎遺跡の場合、出土土器の九五%以上が東海地方の土器だった。従って「土器が運ばれてきた」と考えるより「東海地方の人々が神崎へ来て土器を製作した」と考えるのが、自然であろう。

また、これを裏付けるように分析の結果、土器の作られている土は東海地方のものでなく、神崎遺跡周辺の土であることが明らかにになった。土器だけでなく住居の形も関東地方によく見られるものではなく、東海地方の影響を受けたタイプであることも分かっていた。

二つ目は、未調査部分を多く残す遺跡であることが評価されたことだ。遺跡は掘らなければ分からないので、できるだけ多く発掘調査をした方がいいと思うかもしれない。

しかし、一度掘ってしまえば、発掘調査はやり直しができない。発掘調査の技術



土器には東海地方の特徴が見られる



平成20年度の発掘調査の様子

が現在より進歩した未来に、未調査の遺跡がないのでは困る。そのため、遺跡を掘らずに残すことが必要なのである。

開発等に伴い消滅するので、記録を残すため発掘調査が実施されることが多い。しかし、神崎遺跡は開発ではなく、市史編集に伴う調査が主な調査であったため、遺跡のほとんどは手つかずのまま残っている。

保存整備計画を検討

神崎遺跡は五千平方メートルほどの小ぶりの環濠集落である。この山椒のように「小粒でピリリと辛い」環濠集落を当市の活性化のよりどころとするため、平成二十三年度より、保存整備計画策定委員会を立ち上げ、検討しているところである。

国史跡であるので、市民をはじめ、広く多くの方々に訪れていただけるように、今後とも考えていきたい。

孤独死ゼロ、加入率100%の秘けつ

大山自治会の「助け助けられる」コミュニティ」について

NPO法人 全国生涯学習まちづくり協会 事業部長

佐藤裕介

東京都立川市の中心部に広がる国営昭和記念公園。その北側近くに位置するのが都営上砂一丁目アパート（通称・大山団地）だ。二十七棟（二十九区）、千三百世帯、三千百人が入居・生活している。この団地で、関係者が胸を張るのが、団地の自治会加入率一〇〇%と孤独死ゼロの記録である。

安全・安心な居場所づくり

これを支えているのが、団地の自治会組織「大山団地連合自治会」の取り組みだ。大山団地自治会会長を務める佐藤良子さんがこの間、こだわってきた「日常の安全・安心な居場所づくり」が背景にあるようだ。

平成十一年、大山自治会初の女性会長となった佐藤さんは「自治会とすべての生活を女性目線で」と、住民との対話に心がけ、団地内のほとんどの人の名前を覚え、高齢者と子どもに優しいまちづくりに腐心してきた。大山自治会の原点は「助け助けられるコミュニティ」の形成だという。



団地内行事のひとつ コマー防災訓練

こうした考え方に基づき、さまざまな自治会改革に取り組んできた。その取り組み例を挙げると、
▽防災組織の強化、防災訓練の実施、
▽路上違反車両撲滅運動、▽三宅島噴火による避難者受入れ、▽孤独死対策としての両隣り見守り、一人一役助け合い活動、▽自治会葬儀の実施、▽ボランティア組織と人材バンクの登録制度、▽十七年に孤独死ゼロ達成、▽悪徳商法 オレオレ詐欺追放活動の展

開、▽防災ウォークラリー大会導入など様々だ。

これらの施策とともに、①女性の活用、活動への参画②自治会役員の年齢層別構成③ボランティア活動への参加など、「可能な限りの全員参加」にも力を注いできた。

「二連の活動を通じ、住民に自治会の必要性を納得、実感していただいたことが自治会加入率一〇〇%達成につながった」と佐藤さんは語る。

一軒が両隣りを見守る

団地住民は現在、六十五歳以上が約九百人（独居高齢者三百人）と、高齢化率は三〇%。団地内には「シルバードピア」と呼ばれる高齢者専用住宅（三棟、百五十世帯）もある。そこで大山自治会では、自宅の両隣りを見守る活動を導入し、一軒が二軒を見ることを徹底している。

自治会費を戸別訪問で徴収する際には会話を。また地域に出入りする電力会社やガス会社、水道局、新聞販売店などにも協力してもらい、新聞・郵便物の滞りや洗濯物の干しっぱなしへの注視など、お年寄りを見守る目を増やしてきた。

団地内での日常的な行事への参加呼びかけなど、住民同士の日常の交流をしやすくするような小さな工夫・努力を重ねてきた。

孤独死ゼロの達成・維持は、個別の施策ではなく、地域の団体や組織との連携など、まさに「助け助けられる」関係から生まれてくるものであること

を実感させられる。

被災世帯の受け入れも

大山自治会は、大震災・原発事故の被災地から九十三世帯、二百八十人を受け入れている。着のみのまま避難してきた人々に優しく応え、食料や衣料・毛布・化粧品はもちろん、リサイクル店と連携し、電気洗濯機から日用品にいたるまで、きめ細かな支援が施された。

ここでは平成十二年、三宅島からの被災者受入れの経験が活かされている。現在は避難者への就職の世話や避難者との交流旅行など、日常生活回復への支援を行っている。

こうした地域活動への貢献が認められ、佐藤会長は昨年十月、東京都から功労者表彰を受けた。大山自治会の活動は「助け助けられるコミュニティ」（悠光堂刊）として紹介されたが、自治会メンバーによる団地内での挑戦はなお続いている。



自宅から団地内を望む佐藤自治会会長



大分市長 ● 釘宮 磐

新しい百年に向けてのまちづくり

昨年、三月十一日に発生した東日本大震災からまもなく一年になります。犠牲となられた皆様のご冥福を改めてお祈り申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興を心から願っています。

この度の震災は私たちに様々な試練と教訓を与えましたが、とりわけ「人はひとりで生きていくことが難しい」ことを被災地の現場や避難所生活の様子から教えられました。よく言われるように、戦後の急速な経済発展の中でつい置き忘れてきた人と人とのつながり、「絆」の大切さを、この国難により改めて思い知らされた気がします。

思い起こせば九年前、市長に就任した際、これからの大分市のまちづくりには「地域コミュニティの再生」が最優先であると考え、従来の行政主導のまちづくりではなく、市民と行政が共に力を合わせて行う「市民協働のまちづくり」を提唱したことが今さらながら思い起こされます。

さて、昨年末の大分市の高齢化率は二〇・五二％と、本市でも高齢化が進んでいます。地域住民と関係機関、行政が協力して地域包括ケアの推進にあたる「地域ネットワーク会議」の開催等を通じ、高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らすための取組みを進めております。子育てについても、地域でのボランティアの皆さんによる子育てを行政が支援する「地域コミュニティ応援事業」に力を注いでいます。こうした取組みは本市に限りませんが、少なくとも九年間進めてきた「市民協働のまちづくり」により高齢者の生活を支え、子どもを健やかに育てる地域コミュニティが着実に成長してきたと変化を実感しているところです。

昨年からは新たに、挨拶を交わして一言を添える「あいさつOITA+1運動」を全市的に展開しておりますが、平成十七年に「全市いっせいごみ拾い大作戦」によりギネス記録を創った本市ですので、この原点を今一度思い起こし、挨拶と笑顔にあふれる、安心して生活できるまちをつくりたいと思います。

安心・安全といえど自然災害に対する備えも大切です。

自主防災組織がほぼ全ての自治区にできましたが、東南海・南海地震の発生が想定される現状の下、最優先で施策を展開していかなければなりません。まず、自分の身は自分で守るという「自助」、住民の皆さんが一体となって手をとりあいながら助け合うという「共助」、そして防災無線や防災メール等による迅速な情報伝達、避難訓練の実施、津波避難ビルの指定の推進といった「公助」、こうした役割をそれぞれがしっかりと果たしていくことで地震を含めたあらゆる災害に対応できる体制を構築してまいります。

こうした中、本市は昨年四月に誕生百年を迎え、新たな百年に向けてのスタートを切ったところです。時あたかも本市のJR大分駅周辺では新しい県都の顔となるまちづくりが着々と進みつつあり、三月十七日にはJR日豊本線の高架化が完成し、駅の南北を自由に往来できるようになります。平成二十五年七月には駅の南側に文化ホールや図書館、総合福祉保健センター等を併せ持つ複合施設「ホルトホール大分」が完成し、併せて駅南口から上野の森を結ぶ幅員百メートルの緑の芝生が張られたシンボルロードもできあがります。また、二十七年の春にはJR大分駅ビルが完成し、県立美術館も駅から歩いて行ける距離にできあがる予定です。

まさに、中心市街地が本市百歳の誕生日を契機に大きく変わっていくこととなります。ここを訪れる人が駅周辺の新しい魅力ある施設から駅北側の近年買物客の減少が進む中心部商店街に向けていかに回遊する動線をつくっていくか、どうやって大分の香りを感ぜてもらうか、街の魅力を創っていくかという議論が始まっています。が、新しいまちづくりへの絶好のチャンスであり、市民と行政、商店街の皆さんとが一体となって時間をかけ、議論を深めていきたいと思っています。

震災後の復興、円高、続く景気の低迷など大変厳しい時代を迎えています。市政執行の背骨ともいえる「市民協働のまちづくり」を諸施策の基本に据えて、将来に希望の持てる、そして住むことを誇りに思えるまちづくりに市民とともに頑張つてまいります。

橋本市は和歌山県の北東端、紀伊半島のほぼ中央に位置し、北は大阪府、東は奈良県に接する、京阪神エリアへの交通も便利で、四季折々の自然が楽しめる緑豊かな田園都市です。

平成24年3月にリニューアルオープンする「やどり温泉いやしの湯」は、熊野高野世界遺産のひとつである霊峰高野山の玄関口であり、名勝玉川渓流の美しい自然に囲まれた場所に位置しています。地下1300mから新掘した秘湯と、地域の山菜や野菜・果物、鹿や猪などの自然の恵みを楽しんでいただけます。

また、高野山の玄関口として古来より栄えた橋本には、歴史的な遺産も数多く存在しており、なかでも「隅田八幡神社」は、日本最古の金石文として国宝に指定されている「人物画像鏡」が所蔵されています。

養鶏業も盛んで、卵の生産は県内の生産量の約50%を占めます。地元商工会議所により、卵を産み終わった鶏【ひね】を使ったご当地メニュー開発の取り組みも行われています。

自然の恵みと歴史の豊かさを感じられる街「はしもと」へ是非、お越し下さい。



■やどり温泉いやしの湯 平成24年3月2日にリニューアルオープンする温泉宿泊施設



■隅田八幡神社の秋祭り 毎年10月に行われ、およそ100人で屋舂（だんじり）を担ぐ県内最大のもの。その勇壮な姿は県の無形民俗文化財にも指定されている



■玉川峡 澄んだ清流と狭い谷あい紅葉が映え、その景観は県の名勝に指定されている。鮎・アマゴ釣りなども楽しめる



■子安地藏寺 「関西花の寺」にも選定されている、フジの花で有名なお寺



■はしもと広域観光案内所 橋本だけでなく、周辺地域の観光情報やパンフレットも揃えている



■ひねメニュー 卵を産まなくなった鶏【ひね】を使ったご当地メニュー



■利生護国寺 聖武天皇が行基に命じて建てた朱柱が映える美しい寺院。本堂は国の重要文化財に指定されている

平成23年度 地域再生実践フォーラムを開催

新たな視点や手法の導入等による地域の再生、持続可能な地域づくりを目指し、地域活性化に向けた実践的エッセンスを広く提言・発信します。

- 日時 平成24年3月7日(水) 14:10~17:15
- 会場 東京国際フォーラム(東京都千代田区丸の内3丁目5-1)
※同会場にて13:00より第16回ふるさとイベント大賞表彰式が開催されます。
- 対象 地域再生に関心がある方 400人(参加無料)
- 申込期限:平成24年2月17日(金)
- プログラム

基調講演 14:10~15:10

「大震災後の日本経済と地域活性化を考える」

講演者:高橋 進氏(㈱日本総合研究所理事長)

分科会 15:25~17:15

①「地産地消の自然エネルギー」

コーディネーター:室山 哲也氏(NHK解説主幹)

パネリスト:柏木 孝夫氏(東京工業大学先進エネルギー国際研究センター教授)

田中 伸男氏(国際エネルギー機関(IEA)前事務局長)

牧 葉子氏(川崎市環境局担当理事)

②「持続的な観光振興による真の地域再生の実現」

コーディネーター:清水 慎一氏(立教大学観光学部特任教授)

パネリスト:大西 雅之氏(㈱阿寒グランドホテル代表取締役社長)

山口 スティーブ氏(㈱トラベル東北代表取締役)

七條 牧生氏(観光庁観光地域振興課長)

●申し込み方法

希望する分科会(①、②のどちらかお選びください)、お名前、ご住所、電話番号、勤務先・団体をご記入の上、メールまたはFAXでお申し込みください。

※様式は、ホームページからダウンロードできます。

※後日、ご指定の宛先に入場者証をお送りいたします。

●問合せ先

(財)地域活性化センター 地域支援課

〒103-0027 東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階

TEL (03) 5202-6137 FAX (03) 5202-0755 E-mail chiiki@jcrd.jp



...

平成24年度 日本橋イベントスペース出展団体の募集!

全国各地で行われている特産品開発や観光おこし等の活動が促進されるよう、地方公共団体等の皆様へ、各地域の産品や観光PR等を目的としたイベントを実施するためのイベントスペース(日本橋プラザビル1階南広場:屋外)を無料で提供しております。日本橋で地元産品や観光PRを行ってみませんか。

- ◆場所 東京都中央区日本橋2-3-4
日本橋プラザビル1階南広場(屋外)
- ◆スペース:80平方メートル(最大テント5張)
- ◆会場使用料:無料(テント、テーブル、椅子などの機材も貸し出します。)
- ◆利用日数:2日間を基準(土、日、祝日及び年末年始を除く)
- ◆募集期間:平成24年2月1日(水)~2月22日(水)
- ◆申込方法:所定の利用申込書に必要事項を記入し、FAXにて送付してください。



申込等の詳細はセンターHP(<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/>)よりご覧ください。

《お問い合わせ先》
地域づくり情報課
TEL:03-5202-6138

平成23年度地域活性化ガイドブック 「起業・創業支援による地域活性化」発行!

少子高齢化・人口減少社会の到来、経済のグローバル化など、社会全体が大きな転換期を迎える中、地域を取り巻く環境も大きく変化しています。このため、自治体においては、地域の活力を生み出す産業振興が地域の自立的な発展に欠かせない施策となっています。

こうした背景をもとに、自治体においては、従来の企業誘致に依存するだけでなく、地域内での地場産業の振興等に加え、起業・創業に焦点を合わせた内発型の振興に力を入れていく必要があります。

そこで、当センターでは、産業振興の中核施設であるインキュベーション施設などを拠点に、起業・創業支援や起業・創業につながる新技術・新商品等の開発支援に取り組む自治体の特徴的な事例や、農業分野での新産業創出による起業・創業支援の事例を紹介するとともに、関係省庁における起業・創業等に関する施策解説を盛り込んだガイドブックとして「起業・創業支援による地域活性化」を発行しました。ぜひご活用ください。

●問合わせ先
企画・コンサルタント業務課
TEL:03-5202-6133



★日本橋プラザビルイベントスペース

2月

- 2月2日(木)～3日(金)
真岡市(栃木県)
『ベリ－HOT・HOTな真岡(もおか)市の観光物産展』
- 2月6日(月)～7日(火)
豊川市観光協会(愛知県)
『豊川市観光物産展』
- 2月8日(水)
山口県(山口県)
『おいでませ山口館 来館者100万人達成記念イベント』
- 2月10日(金)
八街市、八街市優良特産落花生推奨協議会(千葉県)
『落花生の郷やちまた 物産展』
- 2月15日(水)～17日(金)
七尾市、七尾特産品協会(石川県)
『能登七尾特産品フェア ～食と心のおもてなし～』
- 2月29日(水)～3月2日(金)
淡路市、淡路市商工会、淡路市民宿組合(兵庫県)
『～日本発祥の地“淡路島”～御食国(みけつくに) キャンペーン』

3月

- 3月15日(木)～16日(金)
盛岡市(岩手県)
『盛岡 大型観光キャンペーンin東京』



(写真)

1 2 12月7日～9日青森おいらせ・ブランド 新青森開業・新特産品フェア(おいらせ町)

【編集後記】

▼今月の特集テーマは「演劇による地域活性化」です。過去には、農村歌舞伎や能など伝統芸能を切り口にした特集を掲載しましたが、今回は住民や地元劇団などによる演劇活動に焦点を当て、地域との関係を探りました。

▼事例は、脚本家・倉本聰さんの「富良野塾」閉塾後も富良野演劇工場として続けてきた取り組みや、劇作家の故・つかこうへいの遺志を受け継いだ東京北区の劇団、俳優の仲代達矢さんの「無名塾」が縁となった能登演劇堂の活動など多彩です。演劇が地元住民を啓発し、地域に刺激を与えていることがうかがえます。

▼埼玉大学の後藤和子教授には、演劇による地域活性化の今日的な意味を考察いただきました。この中で、演劇と地域の関係はコミュニティの絆回復や観光客増による経済効果などにとどまらず、より多面的で多くの可能性があると指摘、アートフェスティバルを一つの切り口に国際的な視野から見解を示しています。

▼弊誌の編集作業中、富良野の演劇工場から富良野GROUP公演2012冬「マロース」が開幕した...との知らせが届きました。一方、岩手県滝沢村の劇団ゆうからは「一月中旬、宮古市内の小学校で全児童らとミュージカル公演を開催し、校庭にぎわい建てられた仮設住宅の皆さんにも観ていただいた」との追伸がありました。こうした活動はまだ続くそうです。(原田)

【3月号予告】

特集II 地域づくり総務大臣表彰(仮)

〈訂正〉1月号の目次中、「津島市」を「対馬市」に訂正します。また12ページ神栖市の記事で、荒井昭男氏の肩書「恩栖神社檀宜」を「恩栖神社檀宜」に修正します。

地域づくり2月号

2012年2月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。地域づくり情報課(03-5202-6138)まで、ご連絡下さい。

宝くじは、
地方自治体の公共事業等に
幅広く使われています。

NEW

ワクワク、
続々。



宝くじの収益金は、
病院や検診車、図書館や動物園、
災害に強い街づくり、
緑あふれる公園、美術館など、
皆様の暮らしに役立てられています。